

カニバリズム，野蛮人，海賊

レベッカ・ウィーバー＝ハイタワー『帝国の島々
——漂着者，食人種，征服幻想』
における植民地主義のトポス

本 橋 哲 也

〈翻訳解題〉

以下に訳出するのは、レベッカ・ウィーバー＝ハイタワー『帝国の島々——漂着者，食人種，征服幻想』(Rebecca Weaver-Hightower, *Empire Islands: Castaways, Cannibals, and Fantasies of Conquest*, University of Minnesota Press, 2007) の序章である「島々と所有の物語」である。本書は、シェイクスピアの『テンペスト』からデフォーの『ロビンソン・クルーソー』、そして数多くの「漂着者物語」を経て、現代の小説や政治言説、映画にいたるまで様々なテキストにおける「植民地主義的かつ帝国主義的な島のトポス」を精神分析理論の応用によって詳細に検出する。すでに日本語による翻訳書としても多くの読者を得てきたピーター・ヒュームの『征服の修辞学』やホミ・バーバの『文化の場所』以来のポストコロニアリズム批評の到達点を示す一冊であり、学者間でもたいへん高い評価を得てきた文学文化研究の画期的な成果と言える。本書では、帝国主義の社会心理学的な解析として、島に漂着した「遭難物語」を読む「西洋の」読者が、いかに植民地支配や帝国主義的な暴力、さらには新自由主義的な経済搾取を正当化できるような情動を育み、ひいては文化、政治、経済にわたるヨーロッパ中心主義的な世界支配をそうした文化的機制が支えてきたかが、微細な言説読解によって明らかにされる。「島」という場所が支配と統制の契機として歴史上いかに重要であったかを再認することのできる文化批評の秀作として、独自の帝国主義島国国家であり植民地主義からの脱却がいまだに主要な政治的社会的課題であり続けている日本において、多くの一般読者に読まれるべき著書と考えられる。原著の著者であるレベッカ・ウィーバー＝ハイウオーターは現在、アメリカ合州国の北ダコタ大学准教授。この本が最初の単著であり、また日本語に訳された著作はなく、出版されれば最初の日本語における紹介となる。

本書の目次を紹介しておく。

序章 島々と所有の物語

第一章 島を睥睨する君主

カニバリズム，野蛮人，海賊

レベッカ・ウィーバー＝ハイタワー『帝国の島々
——漂着者，食人種，征服幻想』
における植民地主義のトポス

本 橋 哲 也

〈翻訳解題〉

以下に訳出するのは、レベッカ・ウィーバー＝ハイタワー『帝国の島々——漂着者，食人種，征服幻想』（Rebecca Weaver-Hightower, *Empire Islands: Castaways, Cannibals, and Fantasies of Conquest*, University of Minnesota Press, 2007）の序章である「島々と所有の物語」である。本書は、シェイクスピアの『テンペスト』からデフォーの『ロビンソン・クルーソー』、そして数多くの「漂着者物語」を経て、現代の小説や政治言説、映画にいたるまで様々なテキストにおける「植民地主義的かつ帝国主義的な島のトポス」を精神分析理論の応用によって詳細に検出する。すでに日本語による翻訳書としても多くの読者を得てきたピーター・ヒュームの『征服の修辞学』やホミ・バーバの『文化の場所』以来のポストコロニアリズム批評の到達点を示す一冊であり、学者間でもたいへん高い評価を得てきた文学文化研究の画期的な成果と言える。本書では、帝国主義の社会心理学的な解析として、島に漂着した「遭難物語」を読む「西洋の」読者が、いかに植民地支配や帝国主義的な暴力、さらには新自由主義的な経済搾取を正当化できるような情動を育み、ひいては文化、政治、経済にわたるヨーロッパ中心主義的な世界支配をそうした文化的機制が支えてきたかが、微細な言説読解によって明らかにされる。「島」という場所が支配と統制の契機として歴史上いかに重要であったかを再認することのできる文化批評の秀作として、独自の帝国主義島国国家であり植民地主義からの脱却がいまだに主要な政治的社会的課題であり続けている日本において、多くの一般読者に読まれるべき著書と考えられる。原著の著者であるレベッカ・ウィーバー＝ハイウオーターは現在、アメリカ合州国の北ダコタ大学准教授。この本が最初の単著であり、また日本語に訳された著作はなく、出版されれば最初の日本語における紹介となる。

本書の目次を紹介しておく。

序章 島々と所有の物語

第一章 島を睥睨する君主

第二章 島と訓育——白人の父権，ホモソーシャルな男性性，法

第三章 飢えたる食人種，貪欲なる海賊，体内取り込みへの抵抗という脅威

第四章 野生への下落——野蛮人，怪物，獣性という汚れ

第五章 島の物語のパロディとクルソー風の見世物——内部からの抵抗

第六章 アメリカ合州国という島の幻想——ギリガンとともに漂着して

以下に訳出する序章は、本書の目論見と構成を整理し、詳細に論述しており、この著作がカニバリズム言説分析や、植民地主義・帝国主義における心理機製の探究において持つ画期的な意義を明らかにしており、現在のポストコロニアル文学文化批評における指標のひとつとなるべきものであることを示している。英語圏文学における他者表象の論理と心理を研究するさいの必読書のひとつとして、紹介を行わせていただく次第である。

〈翻訳〉

レベッカ・ウィーバー＝ハイタワー『帝国の島々—漂着者，食人種，征服幻想』における「序章 島々と所有の物語」

『ギリガンの島 (*Gilligan's Island*)』[訳注：アメリカ合州国のCBS放送で一九六四年から一九六七年までから放映されたコメディドラマ。日本でも日本テレビで『ギリガン君 SOS』『もうれつギリガン君』として放映された]。『ロビンソン・クルソー (*Robinson Crusoe*)』。『幻想の島 (*Fantasy Island*)』[アメリカ合州国のABC放送で一九七七年から八四年まで放映された人気番組]。島は私たちを魅惑する、本物の島も想像上の島も、神秘に包まれた島も自然に溢れた島も。浜辺の夕暮れが情欲をかきたて危険な香りが漂う島——島にはロマンスと冒険を誘う何かがある。島々の魅力はさまざまな文芸を生みだしてきた。とくに人気があったのは一五世紀から二〇世紀初期にかけてヨーロッパが世界の大半を植民地にしていった時期に書かれた物語で、ひとりの人間が、それも多くの場合はひとりの男が、ある島に漂着する話を典型とする。彼はほぼ自らの才覚とココナツの実だけで島のもたらす危険な状況——飢え、寂しさ、狂気、厳しい天候、食人種、海賊、怪物といった、現実のものも想像上のものも含め——を生き延びることを強いられる。さらに二〇世紀のポストコロニアルな漂着物語においては、こうした話のカギとなる主題の多くが書き直されていく。こうした物語にこれほど長く魅力を与えてきたものは何か？ なぜ島なのだろう？

本書はこうした問いに取り組むために、漂着者ものというジャンルが持っている心理的魅力を詳細に解きほぐし、それがヨーロッパの帝国主義文化の道具として機能するさまを分析する。この本の主張の一つは、漂着物語が帝国主義の暴力を何世代にもわたる読者たちが理解できるよう（そしておそらくは安心できるよう）にと助けることで、ヨーロッパ帝国の拡張と維持を可能とする効果を持ってきたということだ。よってここでは何百年にもわたる漂着物語の系譜が読み解かれる。そうした物語は原型を成す小説であるダニエル・デフォーの

『ロビンソン・クルーソー』（一七一九年）に従って、よく「ロビンソンもの」と呼ばれるが、私としては「島の物語」「漂着者物語」といった名称を使いたい。ここで扱われるのが「ロビンソンもの」には厳密に入らないもの、すなわち（シェイクスピアの『テンペスト』のように）『ロビンソン・クルーソー』の前に書かれたものや、（H.G. ウェルズの『モロー博士の島』やエドガー・アラン・ポーの『アーサー・ゴードン・ピムの話』のように）島を舞台にしてはいてもデフォーの物語には必ずしも適合しないものも含まれるからである。漂着物語が人の心理に与える力を理解するには、それが帝国の拡張と支配を人間の身体にもとから備わったプロセスであるかのように、自然で問題のないものとする過程の分析が必要だ。本書が示すのは、漂着者が自らの生まれつき境界に囲まれた身体を統御するがごとくに自然の境界に囲まれた島の空間を支配するような話を提示することで、こうした物語がこのことを成し遂げるということである。植民地主義に染まった読者が手にする島のような本は、身体のような島の物語を包含しているのだ。そのうえ島が表象する身体は男性的身体であって、その意味で本書は、植民地化する土地を女性的身体とする言説を扱ってきたこれまでの批評を批判的に検証することにもなる。

書物が身体つきの島であるというこの命題を如実に示す例が、ジョージ・ラミングによるシェイクスピアの『テンペスト』の書き換えである『果実の入った水』の一九七一年版の表紙をかざる印象的な絵だろう（図1）。これは私がこの本を始めるにあたって、発想の出発点となる絵だ。ここには身体が島であるひとりの黒人男が描かれている。遠くを見つめて重々しい表情をしたこの男の顔がその身体をなす島の山上に載っており、その両の腕はヤシの木で、その葉である拳が抵抗あるいは焦燥を表わすかのように掲げられている。両腕の背後には霞がかった山があって、闘いに備えて鍛えられた強力な筋肉を思わせる。これを描いたデヴィッド・ホルツマンは（二〇〇三年九月九日の私信で彼が説明するように）「書かれている物語を繰り返すというより…この本の感覚を捉えよう」として、ロンドンの国会とタワーブリッジに似たイメージに上にこの男／島を置き、ビッグ・ベンの陰茎ないしは注射器のような針をまっすぐ男／島の喉を突き刺すように描くことで貫通の脅威を示すようにしたという。この針の効果はともかく、この島がプロスペローのものではなくキャリバンのものであることは明らかだ。この島は支配されるべき女でもなければ、自らの女性的な側面を否定する男でもない。この男／島はその下に国会議事堂を置いてはいるが、さらに議事堂の下には青い海が広がり、今は静かだが同時に力を秘め、おそらく母性のように強い力であらゆる島を、英国をも包んでいる。この男／島の肌の色がほのかに青味がかっているのは、海が彼の肌に浸透していることを示しており、彼の頭の後ろの空は怒りを孕んだ緑色で嵐の到来を告げている。海が島を囲むように、絵全体の周りを紫色がかかった枠が包み、それが「ジョージ・ラミング」という名前に流れ込んでいて、この身体と島がかつて被植民者だったラミングの本のなかに閉じ込められていることを思い起こさせる。この絵とそれが表紙となった

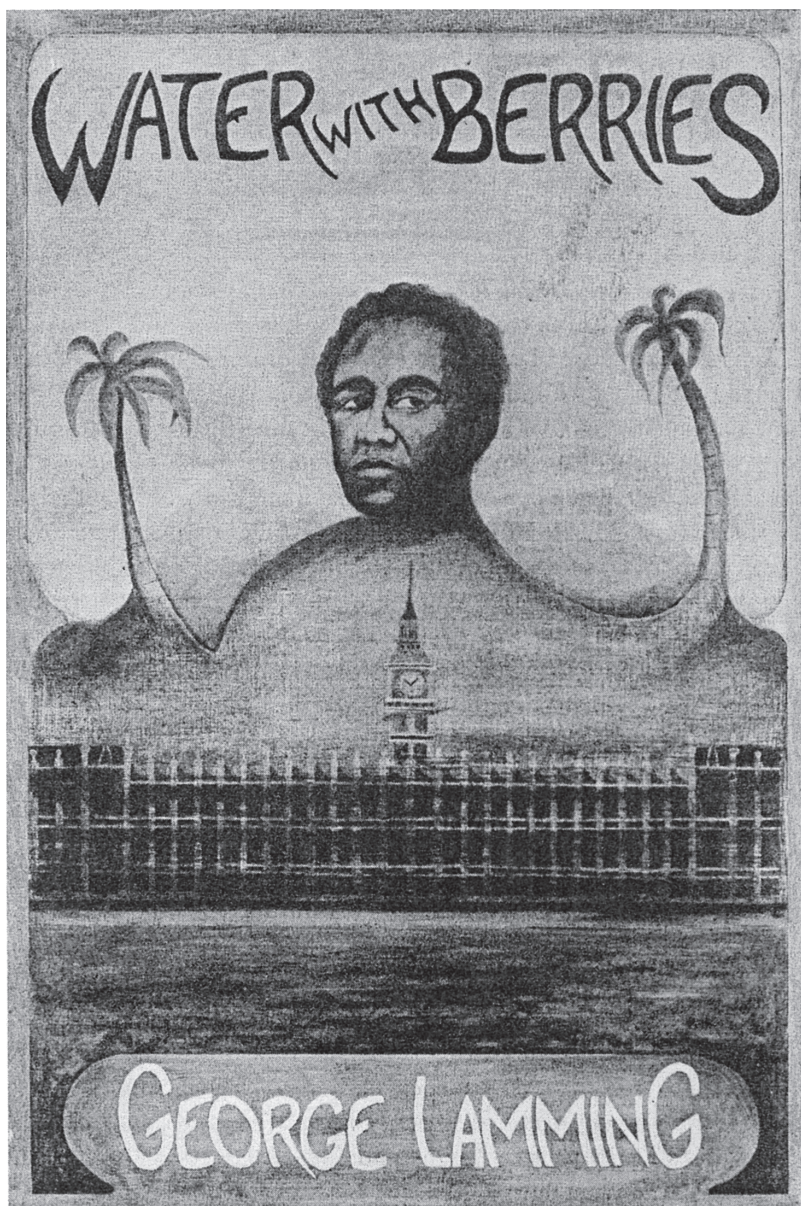


図1 デヴィッド・ホルツマン作の表紙。ジョージ・ラミング『木の実の入った水』(George Lamming, *Water with Berries*, New York: Holt, Rinehart and Winston, 1971) より。

この小説が、本書『帝国の島々』の狙いを具現していると言っていい。すなわちそれは、男性的な島の表象によって土地支配を当然のこととして正当化しようとする心理と文化をめぐる幻想があまりに強力であったために、(ラミングのような)ポストコロニアル作家たちが反植民地闘争の一環として解体してこざるを得なかった、そのような幻想を漂着物語が提供してきた謂われを明らかにすることである。

ラミングの小説はホルツマンの表紙がイメージでしていることを物語のなかで行っており、それは漂着物語を書き換えて島／男／本という主題の連環を植民地主義の道具からポストコロニアリズムの手段へと変換することだ。一九七三年のインタビューで言われているようにラミングがこの小説を書いた目的は、シェイクスピアの『テンペスト』の書き換えを通して、植民地の絆を「断ち切るある種の暴力が必要となる病的な状況」に対して暴力的な反植民地闘争の例を示すことであったという (Kent 91)。キャリバンがプロスペローの心理的残酷さに抗議して言う有名な台詞からタイトルを取った『果実の入った水』は、ロンドンに住むカリブ海諸島からの移民の一群に焦点を合わせ、彼らが自分たちの故郷を支配する新植民地主義的な暴君ネオコロニアルに対して革命を企てるさまを描く。ホルツマンの表紙絵がそれまでの漂着物語における身体／本／島の繋がりを描き直しているように、ラミングの小説もプロスペローをプランテーションの所有者、キャリバンを黒人知識人とすることでシェイクスピアの作品を書き換えているのである。

他にも多くのポストコロニアル作家が漂着物語に対して「書き返し」を行ってきた。たとえばデレク・ウォルコットは一九七八年の芝居『パントマイム』で『ロビンソン・クルーソー』を書き換える¹⁾。ウォルコットの劇では白人でイギリス人のホテル所有者であるハリーが『ロビンソン・クルーソー』を舞台用に書き換え、自分がフライデーを、そしてアフリカ系カリブ人の従僕であるジャクソンがクルーソーを演じる。しかしハリーのこの芝居はリハーサル段階を超えることはない。というのも、始めてみるとハリーがこの人種転換に耐えられなくなって芝居を放棄してしまうからだ。彼が恐れているのは、黒人のクルーソーと白人のフライデーのいる『ロビンソン・クルーソー』が「人の心を傷つける…つまりその人々が…あまりの多くのことを考えすぎて、そういうことは私たちの望むことではなく…ただそのちょっとした…娯楽を提供しただけなのだから」(125)ということである。クルーソーを演じる予定だった黒人のジャクソンは怒りと焦燥に駆られ、そうした理由づけが帝国主義における役割変換をめぐるより広い文脈での闘いを象徴するものだと考える——「今ここで俺たちが演じているのはまさに帝国主義の歴史そのものなんだ」(125)と彼は言う。そしてこれこそウォルコットの言いたいことでもあるだろう——『ロビンソン・クルーソー』とその数多の書き換えや翻案は、帝国主義の歴史と反帝国主義の闘争のなかに存在するのだ。そしてこれが本書『帝国の島々』の要点でもある——漂着物語の心理的側面をより詳細に検討することで、私たちはそういった作品が帝国における文化的不安と欲望とをどのように管理す

カニバリズム、野蛮人、海賊

ることに寄与してきたかをより良く理解できるだろうし、これほど多くのポストコロニアル作家たちがそれらに書き返しを迫るほかなかった理由もわかるはずだ。

歴史的視野

ラミングとウォルコットがカリブ海諸島から声を挙げたように、同じ地域出身のエメ・セゼールも『テンペスト』を標的として自らの『もうひとつのテンペスト』（一九六九年）を書いたわけだが、そのような地域性が島を舞台とする書き換えの必然性を物語るとも言えよう。しかし、島嶼国家出身でない他の多くの作家も地球の各所で植民地主義的な島の物語に対して「書き返して」きたこと、実際に他のジャンルや物語よりもずっと頻繁に漂着した島の物語が書き直されてきたという事実をどう受けとめるべきだろうか？²⁾ この問いに応えるために本書ではポストコロニアルな書き換えから時間をさかのぼって、さまざまな植民地時代の漂着物語を帝国主義の神話と心理幻想の文脈で詳細に分析し、植民地主義にそまった作家や読者の無意識にこういった島の物語が何世代も訴えてきた魅力を探りながら、このような島の植民地化を語ることが現実の帝国についての人々の思考や感覚にどう影響してきたかを検証していこうと思う。

文学は歴史的出来事を伝え、また歴史的事象に内容を規定されるものであるから、私としてはできるかぎり、この研究書がカバーする五百年にわたる帝国の歴史的イベントとそれに伴う文学との関係に留意していきたい。植民地主義的な漂着物語のような長い生命を持つ文学のサブジャンルの魅力を検証するためには、それが開始された時点から（そうした時点特定できればだが）多くの作品を扱う必要がある。よって本書では、五百年にわたる文学を「新世界」におけるヨーロッパによる植民地化（伝統的には一五世紀末のコロンブスの航海によって始まったとされている）と、一六一一年のシェイクスピアの『テンペスト』から始めて、十数作の漂着物語を扱っていく。この本で分析されるのは、『ロビンソン・クルーソー』、『スイス・ファミリー・ロビンソン』、『神秘の島』、『珊瑚島』といったよく知られた話から、それほど人口に膾炙していない『ジョン・ダニエルの人生と驚くべき冒険』やパントマイムの『やや移り気な若者ロビンソン・クルーソーと家を綺麗に保つ黒人男フライデー』といった作品、そして最後に『漂着』とかテレビの連続もの『サバイバー』のような二一世紀のポストコロニアルあるいはネオコロニアルな映画や文学の書き換えである。

本書で扱うテキストは、トマス・モアの『ユートピア』やホメロスの『オデッセイ』、^{アイソラリオ}島の文学ジャンル、それにサー・リチャード・バートンによる『千夜一夜物語』のシンドバッド物語などを含む島の物語の長い伝統に従ってはいけるけれども、一五世紀から二〇世紀にかけてのヨーロッパ帝国の拡張に応じて、まさに何百もの異なる島の物語が量産されてきた。本書は帝国に対する態度の変化をたどることで、こうした新自由主義的な漂着物語の歴史的

意義を強調するとともに、個人の漂着から一団の漂着者へと主人公が移ることが帝国主義イデオロギーの変遷を映し出し、個々の企業による経済的計略に基づくものから（キプリングの言い方によれば）「白人男性の重荷」という国家全体のイデオロギーへと変化する過程を考えていく。歴史家たちが指摘してきたように、植民地は単なる経済的利益によって正当化される以上に長く継続してきた。そして島の物語も、帝国の政策と植民地計略とが変わるにつれて変化してきた——ルネサンス期の旅行記のような初期（一五世紀と一六世紀）の幻想に基づいた伝説から、一八世紀のより現実的な島の物語、そして一九世紀の好戦的な島の話まで、それらは形を変えながらも話の語り方が見事に一貫していることは、歴史的な重要性だけでなく心理的社会的な意味を持っていることの証左であろう。

よって本書は歴史に根差しながらも、そうした物語の一貫性をたどり、その心理的社会的な意義を探ることが第一の目的となる。以前の研究によれば、漂着物語はしばしば植民地化を善良なものとして描く傾向があった——一方で漂着者が無人島に流されたのは神の意思であるから不可避なことであり、他方で多くの島の物語において島は無人の場所として、漂着者以前には先住者がいないか、あるいはフライデーとロビンソンの関係のように後から加わった者が先住権を主張しないかのどちらかなので、島の所有が正当なものとするのだ。この本ではこうした議論に加えて、とくに島の物語が作り話にしる、帝国における現実の行いにしろ、それらを身体の心理的経験に結びつけることで植民地化が自然なものとしてきた過程が論じられる。これら多くの島の文学が植民地の風景（この場合は帝国の中心地ではなく植民地）に対する権利の主張を、自分自身の肉体を制御する権利と能力に結びつけていると考えることによって、本書はヨーロッパの帝国主義的文化が幻想を演じ、肉体的幻想と不安を通して帝国の不安に対処するための空間を、島の文学という設定が可能にしているさまを例証していく。

身体としての島

土地と身体との関係を文学作品から分析する研究がまず参照すべきなのは、島や大陸といった風景を身体の内面で表す仕方の探求だろう。レオナード・バークマンが次のように言うように、人の身体は人間にとって世界を認識するさいの最も基本的な語りを提供する隠喩となってきたからだ³⁾ ——「原始時代の人間の生のなかで、自己、すなわち身体は把握可能な唯一の全体性である。人に擬して世界を語ることが他により良いものがないがゆえに、原始的な人間の唯一の世界観となるのである」(8)。人類学者メアリー・ダグラスも『汚穢と禁忌』で、西洋でも非西洋文化でも一般に身体が象徴として機能すると論じ、次のように説明する——「あらゆるものが身体を象徴するのが真実であると同様に（そしてだからこそさらに）、身体が他のすべてのものを象徴するというのも真実である」(122)。「身体とは複

雑な構造であって」とダグラスは述べる、「身体の異なる部位の機能やその関係性が身体以外の複雑な構造をあらわす象徴の源泉となるのである」(115)。本書が主張するのは、島や帝国も明らかにそうした「複雑な構造」であるということだ。

西洋におけるこうした身体の表象概念については多くの理論家たちによる歴史的探求がある。ルネサンス以前の文化においては人間の身体と宇宙とのあいだに統一が目ざされており、肉体が自然世界のミクロコスモスであるという考え方があったと述べるのはバルカんだ。よってたとえば、クルミの実が人間の脳、その殻が頭蓋に似ているので、それが人間の頭を複製すると考えられた。初期近代の文化はこうした身体と世界との類似をいまだに頭で考えた構築物として捉えていたが、しだいにそれは文字通りの照応関係ではなくなり、科学の領域から芸術や神話の領域へと移動していくようになる。『ボディ・クリテシズム』でバーバラ・スタフォードが言うように、一八世紀になっても肉体は象徴として機能し続け、「人間の身体は究極の目に見える参照項であり、あらゆる方法のなかでもっとも理解しやすい方法、あらゆる構造を組織する構造とされていた。個々の部分は異なっていながらそれらを全体として束ねた目に見える自然の造形として、身体はすべての複雑な統合物を組織する範例にして建築基準であったのだ」(12)。認識体系としての身体はさらに一九世紀、二〇世紀になっても機能し続けていたのである。

こうした身体的アレゴリーの格好の例が初期の植民地文学にある——フィネアス・フレッチャーの一六三三年の詩『紫の島、あるいは人間島』がそれで、生まれつつあった大英帝国全体を象徴する島嶼国家の働きを説明するために身体の隠喩が使われている。この詩の最初の方でフレッチャーは島を地理的に三つの政治的領域に分かたれたものとして描き、それを身体の心臓と頭脳と消化器官になぞらえ、その隠喩を一七一頁に及ぶ詩の残りの部分で延々と説明していく。フレッチャーが使うのは読者におなじみの範疇で、これを読む人は自分の体を通して英国の政治的内実を把握することができる。フレッチャーは人の身体と島嶼国家とを同化することで、読者が容易に消化できる隠喩を提示するとともに、英国の政治体制を創造主の手から直接もたらされた天与の組織体として描き、それゆえ国家には従わなくてはいけないのだという教えを唱道する。土地と君主の身体とを結びつける隠喩の働きは初期近代の文化では珍しいことではないと、エルンスト・カントロヴィッツの『王の二つの身体』は言う。このフレッチャーの詩のように身体を使って複雑な政治体制を説明し従属を奨励する作品と同様に、身体の個人による所有と統制という近代的考え方から生まれてきた島の物語も、帝国の名のもとに土地を領有する政府を読者が受け入れ承認するための心理的メカニズムを提供してきたというのが、ここでの私の議論である。

さらに言うと、これまでさまざまな批評が指摘してきたように、女性の身体と土地との心理的つながりを利用することで、初期の植民地主義文学において白人男性による植民地化が正当化されてきた。そうした議論に私の研究が付け加えるものがあるとすれば、それは文学

および地理の空間としての島を統制すべき空間として使うことが、やや異なった帝国主義的幻想を培っているということだ。つまり、土地の支配を他者である女性の身体の支配ではなく、本人自身の男性的身体の統制として土地を支配する——この区別は重要で、そうして初めて、ある場所を植民地とする欲望がよりよく理解でき、そうした行動を心理的に耐えられるものとするのは何かということがわかるようになるからである。本書『帝国の島々』では島の物語を読み解きながら、そのなかにある文化や書き手の無意識のなかにこうした問題を解く鍵を探し、なぜ読者が特定の物語を好み、また作者がどのように言説を選択していったのかを考えたい。島の物語は多くの帝国主義のテキスト、たとえば小説や日記、書簡、新聞、詩、旅行記、報告、芝居、漫画、映画、絵画そのほかの芸術表現のなかに位置づけられるが、こうしたすべてが言わば隠喩の力によって帝国という暖炉の火を燃やし続けてきた。島の物語もその一部として帝国主義的な振る舞いを正当化しているのだけれども、そこにはテキストの形態は異なってもおそらく同じような心理的メカニズムが作用しているのではないかと。私の望みは、こうした島の物語に注目することで暖炉の周りに集まったそれ以外の顔、つまりその他の芸術ジャンルとの区別を明らかにするとともに、さまざま異なるテキストが帝国主義にまつわる不安や欲望のうごめく心理的空間を作っていく過程を理解するのに役立ってほしいということに他ならない。

なぜ島なのか？

島の物語がどうしてこれほどの力と魅惑を持っているのかという問題を考えるためには、この序章の初めに提起した問い、「なぜ島なのか？」に立ち返る必要がある。ポストコロニアル時代の後継者たちと同様、植民地時代の書き手たちが探究と冒険の物語を作るのにわざわざ島を舞台としてくりかえし選んだのは何故だろう？ 説明の一つとして考えられるのは、こうした作家たちが自分の主人公に孤独による緊張と発明の要請という試練を与えたかったのだということがあるかもしれない。しかし一六世紀から一九世紀にいたるまで大陸のかなりの部分がほとんど探索されていなかったわけであるから、個人の自律や才覚を試すには島以外の場所でもよかったはずだ。また第二におそらく言えることは、自らの島（スコットランドとウェールズを含む）や隣接するアイルランドの支配をめぐる戦いの歴史を経験してきたイギリスの作家たちにとって、島という地理が植民地主義的支配の幻想に無意識に結びつけられていたこともあるだろう⁵⁾。『大英帝国の興隆と崩壊』でローレンス・ジェームズが次のように述べている——「北アメリカにおける最初の植民は、スコットランド長老派の移民によるアイルランドにおける大規模な植民と同時期のことであった。一六二〇年から一六四二年にかけて十二万の植民者たちが、ゲール語を話すアイルランドのカトリック教徒を『文明へと強制』するために到着したのだ、とフランシス・ベーコン卿がいみじくも言った

ように」(14)。第三に島を舞台とすることの人気の理由として、多くの有名な現実の体験に基づく帝国主義的探索の記録(コロンブス、ダンピア、クックなど)が島を関心の中核に置いていたことがある⁶⁾。しかしながら本書では、こうしたさまざまな島の物語の分析に基づきながら、これらの説明では不十分であることを示していくこととなるだろう。島を創作の舞台とすることの魅力は(そしてまたおそらく島が現実の植民地化の舞台とされることの魅力は)より根が深く、広い意味での植民地化が「自然なもの」であり、身体と自然界の有機的システムに起因するという幻想を可能にする能力を島が持っていたことから来るのではないだろうか。

植民地化を自然なものとするこの幻想を説明するために、本書で何度も戻ることになる契機である、植民地主義的な漂着物語においてほぼ普遍的なモーメントの議論から始めるとしよう。メアリー・ルイス・プラットが『帝国のまなざし』のなかで、こうした瞬間を「私が睥睨するすべてのものの君主」と呼んでいる(彼女が扱うのはフィクションでも、島の文学でもない旅行記だが)。旅行記ではしばしば、旅する者をそこに連れてきた現地案内者にはすでに見慣れた景色を、旅行者がその場所を目で観察することで「発見」とすると、そのとき彼らは自分たちが代弁する君主の名でその空間の独占所有を宣言する、ということが起きる。プラットの説明によれば、ちょうどマンゴ・パークが「ヴィクトリア滝」という名称をつけたように、しばしば高い位置からなされる観望という単純な行いが、所有している感覚をもたらし、所有権を法的に正当化するのである。

漂着物語というフィクションの世界でも、ほとんどすべての場合に、これと似たような瞬間を見出すことができる。漂着者(ひとりの男、あるいは後になると人びとの小さな集団の場合もある)は最初ひと晩かふた晩、難破に絶望して暗い気持ちでいるか、あるいは日中を難破船から役に立ちそうなものを取ってくることで過ごす。しかし、ある行いが自らの運命を受け入れることになるわけで、つまり漂着者は島に着いてからほどなく、小高い地点に登り、空間全体を見渡すことになる。これが「私が睥睨するすべてのものの君主」の瞬間だ。漂着者の当初の動機は、自分が大陸ではなく島にたどり着いたことを確かめるためかもしれないが、しかしこの睥睨によって、彼は自らの住所を確認し目によって領有することで所有の感覚を獲得する。主人公が島の所有感覚を得るのに、この光景が決定的に重要なのは、この瞬間に彼は「漂着植民者」となるからである。たんに「漂着者」と言わずに、「漂着植民者」という用語を私がしばしば使うのは、こうした物語の底にある帝国主義をあぶりだし、語り意図からすれば、主人公はどこかから切り離されて流れ着いたというよりは、植民の野望をもって連れてこられたと言うべきであって、物語において重要なのは彼が後にしてきた故郷ではなく、彼が到着した島との関係である、ということを強調したいからだ。また私は、漂着者を「植民者」と呼ぶことによって、主人公の運命が自らの行動の結果ではなく、神や自然の導きによるものという、典型的な物語の趣旨を裏切ることも目指したい。なぜなら、

フィクションのなかの漂着者たちの多くは、たしかに嵐にあって島にたどり着いたとはいえ、クルーソーのようにもともと植民者であるか、あるいはヴァイスがロビンソン・ファミリーと適切に名づけたように、植民者になりたかった者たちだからである。この頻繁に繰り返される「私が睥睨するすべてのものの君主」という光景において、山とか丘のような盛りあがった場所に登る以前には、生き残ったサバイバーにすぎなかった主人公が、この瞬間を経ると、島の所有者となるのだ。このようなアイデンティティの劇的変化をもたらす、この瞬間にいったい何が起きているのだろうか？ 説得力のある説明として（さらに島がどうして魅力を持っているかの説明として）、精神分析理論とその身体概念のなかに、その答えがある。

「私という島」(I-Land) と精神分析

人が無意識のレベルで（ほとんどの精神活動がそうであるように）、自らの身体を通して、世界を経験する仕方を考えるには、身体イメージ、まなざし、皮膚と自我といったことに関わる精神分析、とくに体インコーポレーション内化についての精神分析理論が役に立つ。ジグムント・フロイトやメラニー・クラインらの精神分析理論にしたがえば、人が自己と世界との関係を想像するもっとも基本のプロセスはその身体をとおしてであって、私たちはその明らかな例を、自らの口によって世界を体験する幼児に見ることができる。クラインによれば、赤ん坊は吸いこんだり、消費したり、飲み込んだり、吐き出したりといった行いによって、物が口や体をとおして出たり入ったりすることとして世界を理解する。フロイトは、幼児がまわりの環境を口腔によって経験することで子ども時代を過ごしており、欲しい物や理解したい物を口に入れてみるのだ、と言う。デイディエ・アンジューはこの考えを拡張して、赤ん坊が世界とそこでの自分の場所を理解するのは、自らの皮膚を通して、それが大人になって「皮膚的自我」となり、私たちは自分の皮膚との関係において、自らの身体や所有物、他者、そして身近な環境を感知するのだと論じる。我々は大人になっても、自分の身体の内と外にそれぞれ何があるかによって、無意識におのれの宇宙を組み立てるのだ。成長するにしたがって、私たちは文化によって訓練されることで、このような取り込み衝動から直接に表現したり行動したりすることはなくなるけれども、私たちの身体と世界に対する精神的な理解の底には、そのような衝動がつねにあり続ける。西洋資本主義がときに私たちを「食いつくす消費者(consumer)」と呼ぶのは、偶然ではないのである。

身体についてのこうした理解は、島の物語における心理メカニズムの説明として説得力がある。山の頂上で「私が睥睨するすべてのものの君主」として島を展望するときには起きていることの多くが、体内化とまなざしという概念によって説明できるからだ。この情景の最中とその後の漂着者の振る舞いが示唆するのは、彼が自らのまなざしによって島の境界を確か

めているとき、彼は鳥を象徴的に取り込み始めていることである。第一章で詳しく説明するように、この情景の最中および直後の漂着者の言葉と行動は、その瞬間に彼が鳥と自分の身体とのあいだに無意識の関係を結び始めていることを示しており、それが物語のなかで発展して、自らの身体を訓練するとともに、彼は自分が「文明化して手なづける」空間にたいする支配を想像することになるのである。

漂着植民者は、鳥における時間のほとんどを、鳥をより「文明化された」、自分が故郷に置いてきた西洋的な空間にしようと試みて過ごす。失った故郷に似たものを作るべく、小屋や木の上の家、家畜小屋とか東屋、橋、庭、要塞などを建て、空間を馴染みあるものとするだけでなく、やってくるかもしれない侵入者にたいして自分の領土への権利を主張しておくのだ。ここで重要なのは鳥という形である。漂着者の身体と同様、鳥も自然の境界に囲まれている（その全体が山の頂上という視点から展望される）。こうした鳥の形状が冒険と探索の物語に重要な心理的アピールを提供するのだ。鳥は確固たる周囲と自然の境界に囲まれているという性質ゆえに、皮膚に閉じこめられた体という認識を反映することができ、それゆえ作者も読者も自らの身体を所有するように、鳥を支配し所有する幻想を自然に抱くことが可能となるのである。

ここで、人の身体が「自然の境界によって囲まれ」、個人として所有されコントロールされているという考え方にもう少しこだわってみよう。この発想はノルベルト・エリアスのような文化史家によれば、中世や前近代にはなく、近代になって生まれてきたものだという。この概念が二〇世紀終わりから二一世紀初頭には、一種の文化強迫のようなものとなって、ダイエットや健康法、ボディビル、化粧品から整形手術まで大金がつきこまれ、さらにはローウェードの裁判（アメリカ合州国の最高裁が、私たちの体は私有物でそれをコントロールする権利があるという主張のもとに妊娠中絶を法的に認めた判決）に具体的な例を見るまでになった。エリアスは『文明化の過程』のなかで、ヨーロッパが封建時代から近代へと移り変わるにつれて、身体を封建体制のなかで神や王に所有されるものとする以前の考え方が、自立した個として想像することに置き換えられていったと論じる。エリアスによれば、エラスムスが一五三〇年に書いた『子どものしつけについて』という身体機能の適切な扱い方をまとめた本のなかに、身体の文化的把握が中世から初期近代へと移り変わる徴を見ることができると論じる。エリアスは言う、中世の人たちは「中世の習慣として一緒に食事をし、同じ皿から指を使って肉を取り、同じ杯からワインを飲み、同じ鍋や皿からスープを飲んでいた」わけで、「私たち近代人とはお互い同士が異なる関係にあった」（p.69）。同様に、ゲイル・カーン・パスターも、ルネサンス時代における私有観念の発達とともに「恥の境界」が生まれたと論じる。すなわち、人びとが身体機能から心理的にも言語のうえでも距離を置くようになると、もろもろの身体機能を恥と見なすことが増してくる。このように正しい身体的振る舞いについて新しい規則ができて、身体と食べ物や他の身体とのあいだに距離ができるように

なると、封建的な集团的アイデンティティから、経済的個人主義にもとづいたそれぞれのアイデンティティへの移行が起り、それは地理的にも時間的にも商業や国際貿易の増加と一致しており、近代資本主義に内在する消費概念の形成とも軌を一にした動きだったのである⁷⁾。アンソニー・シンノットが『社会的身体』のなかで、次のように同様の観察をしている——「エラスムスの本からたった百年で、個人が孤独で（他者から切り離され）、世俗で（神から切り離され）、二重である（内的に分割されて）という新しい現実がデカルトの「私は考える、ゆえに私は存在する」という言い方で簡潔に表明されたのだ」（p.19）。

身体把握とアイデンティティのありようがこのように変化すると、漂着物語の生産も増加していくことはけっして偶然ではないだろう。シンノットの言葉をふたたび借りれば、「ルネサンス以降、誰もが島になっていく——それをデカルトが示唆し、ダンは異議を唱えたのだが」（p.19）。このように身体が新たに他と区別され境界に囲まれた空間として想像されるようになると、自然な境界によって仕切られた島が、個人によって住まれ、単独で支配する、つまり一言で言えば植民化する空間として完璧であるという想定が生まれてくる。肉体も島も目に見える確固とした境界をもった独自の存在として理解されたので、ちょうど人が自らの皮膚という境界のなかにある中身をコントロールするように、そのような境界に囲まれた空間すべてを一人の人間が支配できるという幻想を、島の形状が支えるようになるのである。島と人の身体とのあいだのこの想像された関係をさらに詳しく検討することで、この本で扱われるテキストが所有の物語としていかに機能しているか、そして漂着者（と読者大衆）がいかに植民を正しいものとして想像するようになるのかの理解を深めることが、ここでの目的となる。

島の物語が示唆しているのは、それを読む読者の帝国主義的な欲望をそうした物語がくりかえし描きながらも、同時に、植民化に内在する不安をも表しているということであって、これらの物語は漂着者の肉体について語ることによって、そうした不安を描写してしまうのだ。征服後、帝国主義の組織はそのエネルギーの大半を、植民地における秩序の維持に振り向ける——官僚機構の整備、道路や社会的設備の建設、先住民間の紛争の仲介、反抗の芽を摘むこと等々。植民者の文化には、反乱への恐れと、帝国主義的征服の道徳性に対する疑問がつねに不安としてつきまとっており、島の物語はそのような不安を表明しているのである。島の植民者の肉体そのものにおいて、帝国の欲望が演じられていたとすれば、不安も同様であって、それはメアリー・ダグラスが『汚穢と禁忌』で言うように、「脅かされたり不安定となった境界こそ、境界によって表象される」からだ（p.115）。島の物語が象徴するのはまさにそのような不安であって、そこではフィクションのなかの植民者が、自らの肉体の境を強化し男性的なものとすることによって、自分の皮膚という境を出入りするものに対する支配力を行使するという幻想を生きている（この点については、第二章で詳しく論じる）。こうした自己防衛イデオロギーはあきらかに男性的なものであって、それはジェンダー、つ

まり実際には男性性こそが島の物語では重要だからである。このイデオロギーによって、力を持った者と無力な者、統御されたものと制御の利かないもの、人間と動物、そして白人と非白人とが区別されていく。第三章で検討するように、海賊につかまったり、食人種に食われてしまったり、先住民と同化してしまったり、刺青を入れられてしまったりといったことが、身体のコントロールを失うことに対する不安の証になっており、それらが植民地主義的秩序の喪失を象徴する一方で、男らしい自己抑制された物語の筋が堅持されることによって、宗主国の読者にとってそうした不安が和らげられたのである。

読者と再コード化

島の物語を読むことが、読者の植民地化に対する反応にどう影響するのか——この問いに答えるために、本書は文学作品における植民化の心理を、植民の歴史的事実のなかに位置づけて探究する（ここで言う植民の歴史的事実とは、実際の植民という出来事とその発展だけでなく、島の物語が書かれた現実の背景、それにこうした幻想が頻繁に繰り返される必要性といったことを含む）。『帝国の島々』の主張は、「普通の」市民が自分たちの帝国について感じていた不安や欲望を手なづける、つまり自分たちの幻想を肯定する手段を、これら島の物語が提供していたのではないかということにある。精神分析医が患者の幻想を分析するときには、繰り返される行動の原因を探るのが常道だ。それに似ているが、反対に、本書の分析は、（漂着者物語の生産と消費という）反復行為を、「患者」（文化）の幻想を探る手がかりとする。ジャクリヌス・ローズは『幻想の状態』（一九九六年）で、幻想を「防衛のための創作」とするフロイトの理論を引き、さらにそれを「心のなかで耳を傾けてほしいとあがいている記憶を純化し、そうすることで何らかの形で記憶を認知しようとする方法」であると説明している（p.5）。この本を通して私は、島の物語が文化幻想として機能してきた仕方を検討する際に、幻想を欲望の表明、恐れに対する防衛し、そして抑圧された現実の証拠として考える、以上のような捉え方を指針としていきたい。

不安や欲望を文化が管理するうえで、どう島の物語が機能してきたのか、またなぜそのような機能を文学が果たしてきたのかを理解するには、ジレ・ドゥルーズとフェリックス・ガタリが『アンチ・オイディプス——資本主義と分裂病』のなかで説明する心理的再コード化の理論が役にたつ。彼らの議論によれば、「エディプス・コンプレックス」とフロイトが名づけた自然な心理状態を記述するときに、フロイトが認識していた欲望と抑制のパターンは、人間の心理にだけでなく、西洋資本主義にも内在するものだという⁸⁾。すなわち、フロイトは文化と経済のシステムを男性の自然な心理的発展の観点から論じることもできたのに、彼は意図せずに社会的文化的なパターンを個人の心理に、つまり通過儀礼の物語として投影してしまったのだ。フロイトは、ヨーロッパ資本主義の社会システムとその社会的軋轢を個人

の心理というモデルに転移（ドゥルーズとガタリの言葉では「心理的再コード化」）してしまい、現実世界の不安や欲望という大きな世界を、「正常な」心と体という微小な世界のモデルに置きかえた。もちろん、フロイトが個人の心理として描いたヨーロッパの資本主義は植民地化のシステムに基づいていたことを、私たちは知っている⁹⁾。よって、ドゥルーズとガタリの定義によれば、フロイトによるエディプス・コンプレックスの理論は、植民地闘争という経済的政治的社会的システムをも説明するのだ。近代世界の経済、政治、社会は帝国の遺産によってもたらされたわけだから、人がいかにアイデンティティに直面するかに関するフロイトの理論がまさに帝国の不安と欲望から発していることは、納得のいく話だろう。

私がドゥルーズとガタリの理論を使うのは、漂着者物語がどうして帝国の欲望と不安という大きな図式の縮小版の役割を果たすのかをそれが説明してくれるからだ。つまり、こうした島の物語の多くは、（植民地化という）社会文化現象にともなう欲望や不安を、（小説の物理的・時間的・空間という）特定の空間に囲われた代表的な物語に映しだし、その主人公である一人の男性の個別な心と体のうえに描写する。かくして、複雑で両義的な社会システムが、本の頁のなかの小説というジャンルに描かれた一人の男の頭のなかに表象されるのだ。ちょうどフロイトがエディプス・モデルを自然なものとして内面化し、それが「通常の」心の発達過程の一部であると考えたように、島の物語の著者たちも帝国主義のイデオロギーを内面化して、ひとりの漂着植民者が生き残って自らの身体を「自然に」管理するという、自然で論理的な行動の一環として描く。こうして島の物語の生産は（著者も、またそのような物語を要求し、それを受け入れた出版人も）帝国が抱える問題や理念を無意識に、孤独な男性植民者の身体に内在化するのだが、それは住民のいない境界に囲まれた一つの島という空間を取り込み支配することによって可能となるのだ。そして、植民宗主国の読者はたとえば、このような島の物語を消費することで、現実世界における欲望を再コード化し、そこに含まれた心理社会的な問題を認知し管理することができるようになったのである。

『帝国の島々』では「心理社会的」という用語をずっと使うが、それはこの本の対象が島の物語における心理学と社会学との複雑な絡み合いにあるからだ。すなわち、ここで私が検討するのは、こうした物語が植民地化の不安を管理するために個人の心を援助することで、心理的な過程に参加する様子である。同ときに本書は、植民地主義の文化システムが島に漂着した話のなかで再コード化される過程を分析することによって、社会的な説明をもめざす。『帝国の島々』は多くの点で、ケリー・オリバーが『心理空間の植民地化』で提唱する理論を実証するものだ。すなわちオリバーによれば、「この理論は心理と社会とのあいだで機能し、それによって精神分析の用語そのものが社会的概念に転化するのである」(p. xiv)。オリバー同様、私も帝国という問題においては、心理と社会という二つの領域が絡み合って互いに依存関係にあることをここで示していきたい。

方法論

ここで少しだけ、私の研究者としての方法論について述べておきたい。『帝国の島々』では一貫して精神分析の議論を採用するが、私が使いたいのは「状況に即した精神分析」、つまりアン・マクリントックが「文化状況に沿った精神分析であって、それは同時に精神分析によって裏付けられた歴史でもある」という意味でのそれだ（『帝国の革ひも』 p.72）。一言で言えば、ランジャナ・カーンナの『暗黒大陸』と同様、ここでも植民地主義の衝動を理解するために文学に焦点を絞るとはいえ、そのとき忘れてはならないのは、精神分析理論が同じ植民地主義の衝動と同時期に作られ、そのような衝動への反応であり、またそれと共犯してもいた、ということである。精神分析において明らかにされる境界に囲われた自己という概念は、自分と対照される他者を必要とするが、そのような他者として、植民地化のプロセスを通して発見される他者以上にふさわしいものがあるだろうか？ 精神分析を植民者の心への窓として使おうとする本書のような研究では、用語や理論を慎重に文脈づけて使うことがきわめて重要だ。なぜなら、カーンナも述べているように、精神分析、それに心理学や精神医学も「ヨーロッパの植民者によって…被植民者を分析し、診断し、抑圧するために用いられ、ときにこうした目的のために学問分野の基本的想定が変えられもした」のである（p.26）。ルービン・ファインのような精神分析の歴史研究者が明らかにしてきたように、この学問は初期の植民地主義に根差した歴史状況のなかから生まれてきたのであって、一七世紀と一八世紀の科学者たちは、心の病を気質の不均衡や悪魔に憑かれた結果と考える代わりに、社会的文化的な原因によって生み出された心理的病気であると見なしはじめていた。フロイトによる無意識の発見と、防衛機制として神経症が認知されることによって、家族とヨーロッパのブルジョワ社会（それはエドワード・サイードによれば、植民地主義の足場の上に築かれていた）とが、そうした病気の温床として精査されることにもなった。精神分析が規定した自己は、たとえ階級、ジェンダー、人種、宗教によって帝国の戦利品からまったく除外されていたとしても、本質的に近代の、すなわちヨーロッパ帝国主義の自己である。（たとえばフロイト自身、自らのユダヤ出自が出世の妨げになると考えていた。）フロイトは精神分析と帝国との関係についてはっきりとした言葉を残していないが、歴史とイデオロギーのつながりについて示唆的なのが『トーテムとタブー』の副題「野蛮人の精神生活と神経症とのあいだの類似関係」であって、そこでは神経症が近代の状況であることが述べられている。フロイトの説明によれば、被植民者、すなわち「野蛮あるいは半野蛮な人種」の精神生活が「我々の興味をとくに魅くのは、そうした人びとの精神生活のなかに我々自身の発達の初期段階が見事に保存されていることがわかるからである」（p.3）。フロイトが活動していた時代は、反復発生理論（類の発達が個の発達の反映であるという考え方）が王座にあっ

た時代であることを思えば、ここで言われている「我々」が植民体制のいわゆる中核に住んでいる近代人であって、その対照とされているのが被植民者であることは疑いの余地がない。

さらに方法論に関することだが、『帝国の島々』は、何世代にもわたる多くの作家たち（その作品から推察しうる限り）と読者たち（彼ら彼女らが選択した読み物から推察しうる限り）の無意識の思考や欲動に探りを入れるのだが、そのさい、無意識への手掛かりをつかむのに、心理学者や精神分析医ならば自由連想や催眠、夢といった者のなかの語りや言語を読解しようとするところを、私は文学テキストを使う。心理学者や精神分析医同様、私もテキストの語りや言語を読み解くが、同時にまた、テキストにつけられた挿絵や販売実績、それがどう使われたかに関する情報まで、すべてが個人と社会の無意識に対する省察となり、文学の社会心理学的影響をさぐるのに役立つ。私たちは自らの読者や教員としての経験から、物語が思考に影響することを知ってはいるけれども、一冊の本を読むことで誰かの意見が変わるとか不安が鎮まるとかいった、明らかな結果をもたらすようなことはあまりなく、幻想にすぎないことが多い。本書のような研究では、そうした証拠はとくに捉え難いことが多い。というのも、作品もそこに出てくる人びとも歴史的に隔たりがあり、読者はといえば、必ずしも作品に対する反応を意識しておらず（しばしば無意識のものであるから）、それを記録できるわけではないからだ。もちろん、あらゆる読者が同じ話に同じ反応をするわけではないのは当然だが、出版するほうでは読者から似たような反応を期待していたはずだ、でなければ形を変えて同じような話を何度も出版することはなかっただろう。このような一般化の危険はたしかにあるが、世代を超えた読者が島の文学を消費し続けたことの心理的社会的な意味を、『帝国の島々』は探究するのである。

本書の性格からしてもうひとつ求められることは、テキストがふくむ物語を読解するとともに、そのテキストがどのように使用され意図され受容されたかの証拠を本のなかにある具体的なかたちとして分析することだ。そのために、本書では随所で出版された本の挿絵を参照して、それが読者に対するテキストのメッセージとしてどのような影響を与えたのか、また挿絵作者がどのように物語を受け取ったかの証拠としても考えてみたい¹⁰⁾。これらの本を何冊も眺めてみてわかったことは、本の装丁によって私自身のテキストに対する態度が影響されており、印象的な挿絵によって特定の場面や人物への自らの反応が形作られるということである。過去の読者たちも同様に、島の物語がどのような形で提供されてきたかに影響を受けてきただろうし、それが挿絵や他の物理的要素を適宜考慮に入れて、（少なくとも出版者が考えていた）読者や文化の隠された心理を探る手がかりとすることに根拠を与えることになる。同様に、こういったテキストが生産されてきた歴史をたどることも、イデオロギーが集団的に作られてきた現実を省察する便^{よすが}となろう。私の分析によれば、テキストはさまざまな人びと（著者、編集者、挿絵画家、出版者、翻訳者）が協力して作り上げたものであって、そのような協働体制が植民地主義のイデオロギーを生産したのだ。さらにこうした出

版に関わる約束事は、しばしばそれ自体が批評的営みでもあった。たとえば、『ロビンソン・クルーソー』の挿絵が以前の挿絵に基づきながらそれらをどのように改変していったかを見ることで、テキスト間の興味深い力関係を観察することができるし、あるいはまた、一九世紀に新しく出版された『ロビンソン・クルーソー』の版にデフォーを英雄化する伝記が序としてつくといった伝統の新たな展開もある。こうしたことがテキストの異なる版のあいだや、長年にわたってさまざまな版を生産してきた多くの人びとのあいだにある隠された関係をはぐくみ、著者と読者との関係と同じくらい強力な伝統を形作ってきたのである。

読者の心理という捉えどころのないものを理解するために、私はさまざまに異なる学問分野や理論の助けを借りてくる必要があった。寓話にある四人の盲人のそれぞれが象の異なる部位を感じて描写しようとするように（ひとり鼻、ひとり脇、ひとり足、ひとり尾）、文化現象の分析には異なるアプローチ（文学研究、ポストコロニアル研究、人類学、地理学、精神分析理論など）が違う言語や約束にしたがって同じ動物（この場合は近代の帝国主義文化の心理）を描写しようと試みるのだ。それらの語りを一緒に束ねることでやっと、帝国と呼ばれる獣を三次元で描写することが可能になるのである。

島の概観

『帝国の島々』全体で、以上述べたようなアイデアがどのように発展するのかを予告しておいても無駄ではないだろう。第一章では、これまで概括してきたこと、島の物語がいかにして欲望を正当化して植民地における権威を確保してきたかが、肉付けされていくことになる。身体と空間の把握に関する精神分析理論を参照しながら、この章では漂着した植民者が自らの空間にたいする支配を想像させるのに役立ついくつかの植民地主義的な行いを分析する。パトリア・シードが「所有の儀式」と呼ぶこれらの植民地主義的行為には、地図作成、建造物の構築、動植物の飼育、さらには漂着者の必要にしたがった地形の変更までが含まれる。これらすべてが、漂着者の変化する身体を島の空間の変化と心理的に結びつける過程であって、それによって漂着者は島への統率力を自然なものとして獲得していくと同時に、自らの身体への統率力（自分のからだに対する「規律」）をも増していくのである。

第二章では、規律と欲望に関するそれまでの議論に基づき、物語が島のファンタジーを作り上げていく際に、いかにして「自然」や「性質」に対する統制が白人の帝国主義的男性性や、男らしい力強さ、自然の法などといったものと同一視されていくかに焦点を合わせる。島の物語にはときに複数の男性主人公が登場するが（ときに女性主人公も）、物語は一貫してもっとも男らしい白人男性が（「男らしさ」の定義は時代によって変化するとは言え）自らの規律と力量によって島の所有権を獲得する過程を描く。この規律をもった男によって、女性や他の漂着者は庇護され統率される必要がある。というのも、彼女たちは白人男性主人

公のような完璧な自己抑制を欠いているので、計画を立てたり熟慮することも肉体的な欲求を抑えることも、明るく振る舞ったり集中心を保つこともできないからだ。『スイス・ファミリー・ロビンソン』が一例だが、漂着者である父親が妻を支配し、四人の息子たちを良き植民者へと育てあげて、自らの肉体にたいする父親らしく男らしい統制を島の法として内面化していく過程が描かれていくのである。

第三章と四章では、島の物語によってトラウマ、とくに想像された自然の帝国主義的なコントロールが崩壊することにたいする植民者の恐怖を管理するプロセスが分析される。帝国主義の欲望を正当化しながら安心を確保するために、こうした物語は島と帝国にたいする脅威を象徴する身体的脅威に打ち勝って排除するドラマを演じるのだ。第三章は食人種と海賊によって漂着植民者が脅かされるという「反体内化」の不安に焦点を合わせ、島と身体とをともに奪われることによって植民者に権威を付与した体内化の行いが反転する語りに注目する。たとえば、島の物語はしばしば食人種と海賊による侵略とを一緒に描き、(『ロビンソン・クルーソー』や『マスターマン・レディ』におけるように) 食人種が植民者の島と身体にたいする先住勢力からの脅威とすれば、海賊は漂着植民者と競い合う「悪い」植民者からの身体と島への脅威を表わすものとされる。第三章ではまた、食人種と海賊の魅惑にも注目し、漂着者がカニバルとなったり(ポーの『アーサー・ゴードン・ピムの物語』のように)、海賊になったり(バランタインの『珊瑚島』のように)することで、登場人物が道徳的な責任から免れ、読者が安全にこうした危険な幻想におぼれることを可能にしたことが検証される。

第四章はコントロールの喪失という議論を拡大して、三章における反体内化の分析から「反転移」の考察へと向かう。第一章で祖述した馴化の物語とは反対に、植民者たちは島によって変移させられることを恐れ、(『ドクター・モローの島』のプレディックが恐れるように)「野蛮な汚点」に侵されて「退廃」し「先住民化」してしまう恐怖を抱えている。ジュール・ヴェルヌの『神秘の島』もそうだが、多くのテキストには規律正しい漂着者とは正反対の野性的な人物が登場したり、島の野蛮さに侵された先住者(人や動物や怪物)が出てきて、それらの人物をテキストは刺青や黒い肌、動物や怪物のような性格で示す。この章では、植民者と島の動物たちの関係を調べることで、いかに漂着者が科学や法の力を借りて島の野蛮さに対抗し、自らの身体の境界を閉じ「汚染」から守ろうとしたかを検証していく。

本書の第五章が検討するのは、自己を正当化する心理がドラマとしてくりかえし展開されることに抗うようないくつかのテキストである。ここで扱われる一八世紀と一九世紀のバレスク上演やパントマイムは、帝国主義のイデオロギーと複雑な仕方で交渉を行っており、人びとが帝国にたいして抱いていた両義的な感情を場所や観客の違いを考慮しながらさまざまに解きほぐしたり具現したりしていた。ギルバートとサリバンの『ユートピア有限会社』とか、トマスダフェットの『にせテンペスト』、ジェフリー・ソーンの『ロビンソン・クル

ーソーと家掃除のハーレクイン・フライデー、およびリバプール町のポリーという名のクリスマス豪華パントマイム』(一八九五年)といった大衆演劇は、いずれも観客の笑いを誘うことで、人びとが帝国の暴力や自己破壊の行動に対して潜在的に抱いていた不満を認知させ促すのだ。ミヒャエル・バフチンが『フランソワ・ラブレーの作品と中世・ルネッサンスの民衆文化』でカーニバルについて論じているように、こうした演劇も抵抗のエネルギーを分散させる制限された空間を提供することによって、民衆の不満を動員すると同時に抑え、最終的には帝国に抵抗するのではなく、その道具として機能してきたと言えるのではないだろうか。

本の最終章は、なぜ現代のポストコロニアルな観衆が島の物語という幻想に魅かれ続けているのかを、アメリカ合州国のテレビ番組(『サバイバー』とか『誘惑の島』など)や映画(『漂着者』や『ビーチ』など)から探ろうとする。こうした二〇世紀終わりや二一世紀初頭の漂着物語の映画版には、アメリカ合州国を中心とする新帝国主義的なファンタジーが機能しているのではないかというのが、この章での議論だ。ここでの主要な関心は、いまや新帝国主義権力の要と考えられているアメリカ合州国が、伝統的な植民地主義言説にまだに頼っていることにある。アメリカ合州国の歴史を考えると、世界の島々が欲望と不安とをともに喚起する場所であることが見てとれる。島ではない国家である(とはいうものの、自らを政治的には島として考える傾向のある)アメリカ合州国は、歴史上、色々な島を州として(ハワイ)あるいは保護領として(プエルトリコやフィリピン)併合する欲望を抱いてきた。しかし同時に、島はアメリカ合州国における不安の場をも形成しており、そのことは南北戦争以来、アメリカ合州国本土への襲撃は、一九四一年一月七日のハワイと、最近では二〇〇一年九月一日のマンハッタンへの攻撃以外にないことから見てとれよう。島と男性的身体と国家の想像力とのあいだに無意識の絆を見出そうとする本書の主張は、真珠湾やマンハッタンへの攻撃がアメリカ合州国の国家的男性性への挑戦であるという考え方を解きほぐす手がかりともなるだろう。ことにそれは、ニューヨークの二つの貿易センタービルを国家的フォラスと見なすことでより明白になるかもしれない¹¹⁾。新帝国主義的な現代においては、企業活動がグローバルに拡大し、テロリズムに対するパニックが国境を越え、第三世界の医療や技術が西洋によって搾取され、情報の専制とも言うべき事態が(医療記録から衛星写真にいたるすべてにおいて)蔓延している。そのような状況では、帝国主義の内的論理をきめ細かく理解することがこれまで以上に必要であり、それには帝国の心理学を探究し続けることが求められよう。『帝国の島々』がめざすのは、植民者が自らの暴力を正当化し、作家たちがくりかえし同じような島のファンタジーを作り続け、読者がそのような物語を喜んで受容し続けることを可能にした、植民地主義の背後にある複雑な心理的プロセスを十全に理解することなのである。

注

- 1) ポストコロニアルな対抗言説による「書き返し」のさらなる分析については、アッシュクロフト、グリフィスズ、ティフィンの『帝国への書き返し』と、ジュディー・ニューマンの『弾丸と文学——ポストコロニアル小説』を見よ。
- 2) すべての書きかえ作品を網羅できるわけではないが、『ロビンソン・クルーソー』から範を得た詩作品のリストには、以下のようなものが含まれる。エリザベス・ビショップの「イギリスのクルーソー」、セント・ジョン・パースの「クルーソーのイメージ」、イアン・クリチトン・スミス「ロビンソン・クルーソーの手帳」(一九七五年)。小説作品としては、ミシェル・トゥルニエの『金曜日』、ミュリエル・スパークの『ロビンソン』、ジャン・ジロドーの『スザンヌと太平洋』、J.M.クツェウの『敵あるいはフォー』がある。『テンペスト』の書きかえには、ラミングの『木の実の入った水』とセゼールの『あるテンペスト』以外にも、の他に、マリナ・ウォーナーの『インディゴ、あるいは水の海図』、ロバートソン・デイヴィスの『捨てられたテンペスト』がある。

他の島の物語(それ自身が『ロビンソン・クルーソー』の書きかえであることもあるが)の書きかえとしては、ウィリアム・ゴールディングの『蠅の王』(一九五四年)と『ピンチャー・マーティン』、マリアヌス・ウィギンズの『ジョン・ダラー』、J.G.バラードの『コンクリートの島』、そして最近ではヤン・マーテルのブッカー賞受賞作『パイの人生』がある。もちろん他の植民地主義テキストの書きかえでよく知られたもの、たとえばシャーロット・ブロンテの『ジェーン・エア』を書きかえたジーン・リースの『広き藻の海』や、エミリー・ブロンテの『嵐が丘』の書きかえであるマリーズ・コンデの『風の吹く丘』のような作品もある。(興味深いことに、原作とはちがって書きかえ作品はしばしば島を舞台としている。)しかし数の上では、書きかえる熱意を促してきた植民地主義的なテキストとして『ロビンソン・クルーソー』と『テンペスト』の二作に勝るものはない。

- 3) 人間の身体が文化的構築物かつ表象システムであることの分析については、メアリー・ダグラスの『自然な象徴』、アンドルー・ブレイキーの『身体——社会学における決定的概念』、クリス・シリングの『身体と社会理論』、アレクサンドラ・ホソンの『社会における身体——入門』、アンソニー・シンノットの『社会的身体』、エリザベス・グロスツの『不安定な身体』、ピーター・ブルックスの『身体活動——近代言説における欲望の対象』、デヴィッド・ヒルマンとカルラ・マツイオの『部分に分かれた身体——初期近代ヨーロッパにおける身体性の幻想』といった著作も見よ。
- 4) ダイアナ・ロクスリーが『悩ましき岸辺——島の文学』で、またドロシー・レーンが『抵抗の場としての島』で、島を植民化とポスト植民化の物語に特異な舞台として検証しており、本研究の確固たる基盤となっている。この二つの先行研究のどちらも島を舞台とした文学の分析に焦点を置いているが、植民地の物語の場所として島という形式が使われ人気を得てきた心理的な理由を探究しておらず、それが本書と異なる点である。ポストコロニアル文学における島の分析については、クリス・ボンギーの『島と亡命』も見よ。エリザベス・デローリーによる「島の祈り、列島のロザリオ——カリブ海と太平洋の列島文学」も、孤島ではなく列島の一部としてではあるが、島という形式を検討している。風景を批判的に分析したいいくつかの研究が、文学に描かれた風景を隠喩として読み解く私の分析を助けてくれた——W.J.T.ミッチェルの『風景と権力』、デニス・コスグローブとステイヴン・ダニエルズの『風景の図像学——シ

ンボルによる表象、デザイン、過去の環境の使用に関する研究』、スティーヴン・ダニエルズの『視覚の場所——英国とアメリカ合州国における風景イメージと国民のアイデンティティ』、およびイーフ・トゥアンの『トポフィリア——環境把握、態度、価値の研究』など。

- 5) 本書ではアイルランドのテキストが研究されていない（アイルランドの人間が書いた『ガリヴァー旅行記』が含まれてはいるが、アイルランド島そのものを舞台としたものは探究対象となっていない）けれども、アイルランドは英国の植民地化の試験場だったのだから、ある意味ではここで扱われている作家によって想像されたあらゆる島々がアイルランドであるということもできる。そのことは、カリブ海諸島、ニュージーランド、オーストラリアほかの島植民地、そしてインド、カナダ、アフリカといった島でない植民地についても事情は同じだ。
- 6) 多くの批評家たちが論じてきたように、こうした最初期の島の物語のなかには現実に起きた出来事を基にしたものがある。『テンペスト』はルネサンス期の有名なシー・ヴェンチャー号の難破を基にした部分があると言われているし、『ロビンソン・クルーソー』も、自分が乗船していた船の船長との口論が原因である島に四年間流されていたアレクサンダー・セルクレイグ（彼の話をもとにしたものでは「アレクサンダー・セルカーク」と呼ばれている）の難破話に基づいている。もうひとつ当時有名だった漂着者には「モスキート・インディアン」として知られていた男がおり、ウィリアム・ダンピア船長によって誤って島に置き去りにされて四年間そこで過ごした。こうした現実の話が植民地的な文学想像力を刺激して、著者も読者も自らの島植民地を創作する幻想にふけたのだ。いったんこうした難破した植民者の物語がヨーロッパ人の想像力に入りこむと、それは定着して帝国主義のトポスとなったのだが、大概の場合こうした漂着者の神話は元々の筋書きの一部しかなく、植民が成功することになる部分だけを採用したと言えよう。
- 7) 経済的個人主義については、イアン・ワットによる議論『小説の勃興——デフォー・リチャードソン、フィールディング』と、C.B.マクファーソンの『所有個人主義の政治理論』を見よ。
- 8) フロイトの理論が西洋資本主義を焼き直したものだという考え方は、精神分析が被植民地で採用されてきた状況を検討すると明らかになる。クリスチアーン・ハルトナック（「フロイトの机上のヴィシュヌ神」とアシス・ナンディ（「野蛮なフロイト」）で論じているように、インド精神分析協会を一九二二年に設立してインドにおける精神分析医のパイオニアと見なされたギリンドラセカール・ボースは、インドの心理学を論じたなかで、フロイトのオイディプス理論を手直ししてインドでは適用せざるをえず、英国の帝国主義的な父権主義に抵抗するインドの現実の必要から、息子が父親に屈する代わりに彼を去勢すると変更したという。
- 9) ヨーロッパの植民地主義との関係における『アンチ・オイディプス』の議論については、ロバート・ヤングの『植民的欲望』が参考になる。ヤングによれば、土地が植民地化されると、アメリカ合州国やヨーロッパの植民者たちはそこに現存していた先住民の言語や教育、経済のシステムを脱領域化したうえで、それらを再領域化する（そうしたシステムをアメリカ合州国／ヨーロッパ／帝国／資本主義のイメージにしたがって再構築する）。フロイトによる転移の議論に懐疑的な論としては、ジョン・ブレンクマンの『異性愛者、男性、近代』も参照のこと。
- 10) 書物の挿画の議論に関しては、エルヴィン・ゴフマンの『ジェンダーの広告』というその後の議論に影響を与えた本、およびグンター・クレスとテオ・ヴァン・リーヴェンによる『イメージを読む——ヴィジュアル・デザインの文法』で創始されたテクニクに従っている。

- 11) 男らしさと9・11とのつながりについては、マーカス・ウィーバー＝ハイタワーの『テロリズムのジェンダーと英雄たち?——2001年9月11日以降、男性と男らしさについて教えるべきこと』、それにアン・マクリントックの「男らしさと他者の戦闘区域」を見よ。

追記 本稿は、2016年度の東京経済大学個人研究助成費（受給番号16-25）を受けた研究成果である。

第二章 島と訓育——白人の父権，ホモソーシャルな男性性，法

第三章 飢えたる食人種，貪欲なる海賊，体内取り込みへの抵抗という脅威

第四章 野生への下落——野蛮人，怪物，獣性という汚れ

第五章 島の物語のパロディとクルーソー風の見世物——内部からの抵抗

第六章 アメリカ合州国という島の幻想——ギリガンとともに漂着して

以下に訳出する序章は、本書の目論見と構成を整理し、詳細に論述しており、この著作がカニバリズム言説分析や、植民地主義・帝国主義における心理機製の探究において持つ画期的な意義を明らかにしており、現在のポストコロニアル文学文化批評における指標のひとつとなるべきものであることを示している。英語圏文学における他者表象の論理と心理を研究するさいの必読書のひとつとして、紹介を行わせていただく次第である。

〈翻訳〉

レベッカ・ウィーバー＝ハイタワー『帝国の島々—漂着者，食人種，征服幻想』における「序章 島々と所有の物語」

『ギリガンの島 (*Gilligan's Island*)』[訳注：アメリカ合州国の CBS 放送で一九六四年から一九六七年までから放映されたコメディドラマ。日本でも日本テレビで『ギリガン君 SOS』『もうれつギリガン君』として放映された]。『ロビンソン・クルーソー (*Robinson Crusoe*)』。『幻想の島 (*Fantasy Island*)』[アメリカ合州国の ABC 放送で一九七七年から八四年まで放映された人気番組]。島は私たちを魅惑する、本物の島も想像上の島も、神秘に包まれた島も自然に溢れた島も。浜辺の夕暮れが情欲をかきたて危険な香りが漂う島——島にはロマンスと冒険を誘う何かがある。島々の魅力はさまざまな文芸を生みだしてきた。とくに人気があったのは一五世紀から二〇世紀初期にかけてヨーロッパが世界の大半を植民地にしていった時期に書かれた物語で、ひとりの人間が、それも多くの場合はひとりの男が、ある島に漂着する話を典型とする。彼はほぼ自らの才覚とココナツの実だけで島のもたらす危険な状況——飢え、寂しさ、狂気、厳しい天候、食人種、海賊、怪物といった、現実のものも想像上のものも含め——を生き延びることを強いられる。さらに二〇世紀のポストコロニアルな漂着物語においては、こうした話のカギとなる主題の多くが書き直されていく。こうした物語にこれほど長く魅力を与えてきたものは何か？ なぜ島なのだろう？

本書はこうした問いに取り組むために、漂着者ものというジャンルが持っている心理的魅力を詳細に解きほぐし、それがヨーロッパの帝国主義文化の道具として機能するさまを分析する。この本の主張の一つは、漂着物語が帝国主義の暴力を何世代にもわたる読者たちが理解できるよう（そしておそらくは安心できるよう）にと助けることで、ヨーロッパ帝国の拡張と維持を可能とする効果を持ってきたということだ。よってここでは何百年にもわたる漂着物語の系譜が読み解かれる。そうした物語は原型を成す小説であるダニエル・デフォーの

『ロビンソン・クルーソー』（一七一九年）に従って、よく「ロビンソンもの」と呼ばれるが、私としては「島の物語」「漂着者物語」といった名称を使いたい。ここで扱われるのが「ロビンソンもの」には厳密に入らないもの、すなわち（シェイクスピアの『テンペスト』のように）『ロビンソン・クルーソー』の前に書かれたものや、（H.G. ウェルズの『モロー博士の島』やエドガー・アラン・ポーの『アーサー・ゴードン・ピムの話』のように）島を舞台にしてはいてもデフォーの物語には必ずしも適合しないものも含まれるからである。漂着物語が人の心理に与える力を理解するには、それが帝国の拡張と支配を人間の身体にもとから備わったプロセスであるかのように、自然で問題のないものとする過程の分析が必要だ。本書が示すのは、漂着者が自らの生まれつき境界に囲まれた身体を統御するがごとくに自然の境界に囲まれた島の空間を支配するような話を提示することで、こうした物語がこのことを成し遂げるということである。植民地主義に染まった読者が手にする島のような本は、身体のような島の物語を包含しているのだ。そのうえ島が表象する身体は男性的身体であって、その意味で本書は、植民地化する土地を女性的身体とする言説を扱ってきたこれまでの批評を批判的に検証することにもなる。

書物が身体つきの島であるというこの命題を如実に示す例が、ジョージ・ラミングによるシェイクスピアの『テンペスト』の書き換えである『果実の入った水』の一九七一年版の表紙をかざる印象的な絵だろう（図1）。これは私がこの本を始めるにあたって、発想の出発点となる絵だ。ここには身体が島であるひとりの黒人男が描かれている。遠くを見つめて重々しい表情をしたこの男の顔がその身体をなす島の山上に載っており、その両の腕はヤシの木で、その葉である拳が抵抗あるいは焦燥を表わすかのように掲げられている。両腕の背後には霞がかった山があって、闘いに備えて鍛えられた強力な筋肉を思わせる。これを描いたデヴィッド・ホルツマンは（二〇〇三年九月九日の私信で彼が説明するように）「書かれている物語を繰り返すというより…この本の感覚を捉えよう」として、ロンドンの国会とタワーブリッジに似たイメージに上にこの男／島を置き、ビッグ・ベンの陰茎ないしは注射器のような針をまっすぐ男／島の喉を突き刺すように描くことで貫通の脅威を示すようにしたという。この針の効果はともかく、この島がプロスペローのものではなくキャリバンのものであることは明らかだ。この島は支配されるべき女でもなければ、自らの女性的な側面を否定する男でもない。この男／島はその下に国会議事堂を置いてはいるが、さらに議事堂の下には青い海が広がり、今は静かだが同時に力を秘め、おそらく母性のように強い力であらゆる島を、英国をも包んでいる。この男／島の肌の色がほのかに青味がかっているのは、海が彼の肌に浸透していることを示しており、彼の頭の後ろの空は怒りを孕んだ緑色で嵐の到来を告げている。海が島を囲むように、絵全体の周りを紫色がかかった枠が包み、それが「ジョージ・ラミング」という名前に流れ込んでいて、この身体と島がかつて被植民者だったラミングの本のなかに閉じ込められていることを思い起こさせる。この絵とそれが表紙となった

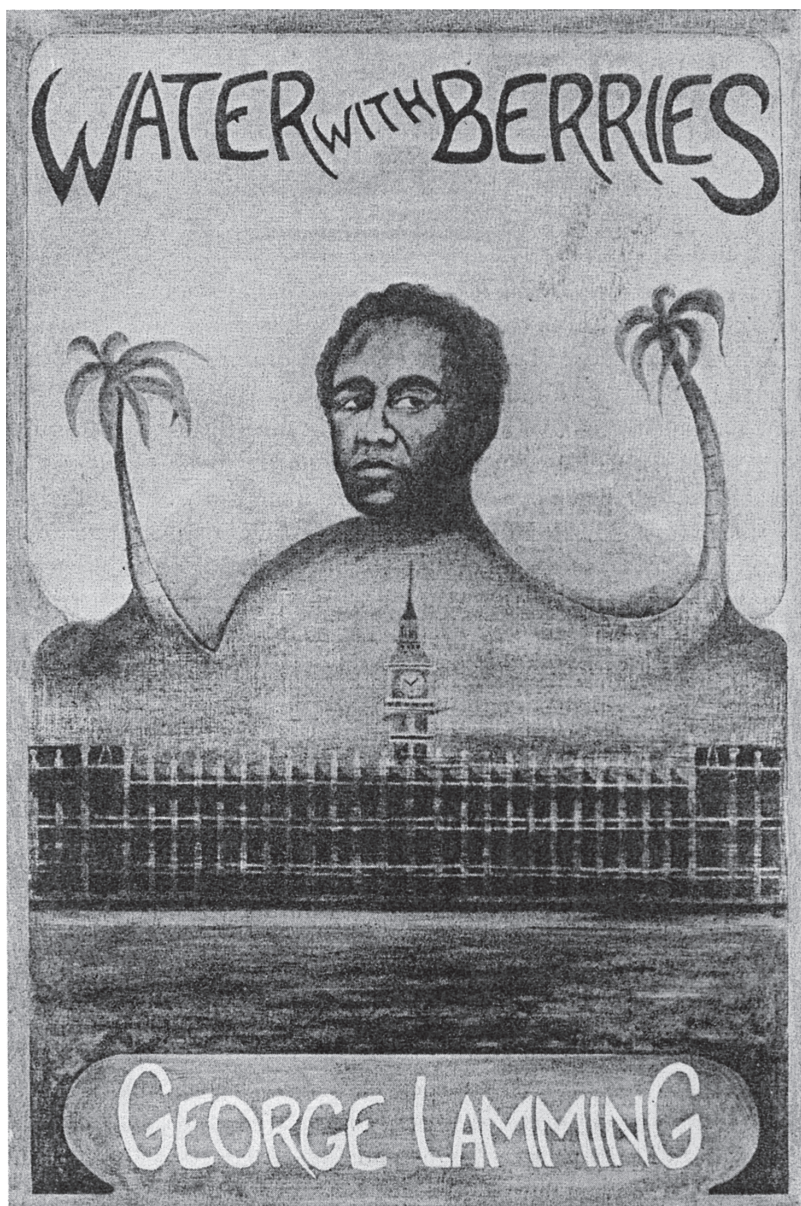


図1 デヴィッド・ホルツマン作の表紙。ジョージ・ラミング『木の実の入った水』(George Lamming, *Water with Berries*, New York: Holt, Rinehart and Winston, 1971) より。

この小説が、本書『帝国の島々』の狙いを具現していると言っている。すなわちそれは、男性的な島の表象によって土地支配を当然のこととして正当化しようとする心理と文化をめぐる幻想があまりに強力であったために、(ラミングのような)ポストコロニアル作家たちが反植民地闘争の一環として解体してこざるを得なかった、そのような幻想を漂着物語が提供してきた謂われを明らかにすることである。

ラミングの小説はホルツマンの表紙がイメージでしていることを物語のなかで行っており、それは漂着物語を書き換えて島／男／本という主題の連環を植民地主義の道具からポストコロニアリズムの手段へと変換することだ。一九七三年のインタビューで言われているようにラミングがこの小説を書いた目的は、シェイクスピアの『テンペスト』の書き換えを通して、植民地の絆を「断ち切るある種の暴力が必要となる病的な状況」に対して暴力的な反植民地闘争の例を示すことであったという (Kent 91)。キャリバンがプロスペローの心理的残酷さに抗議して言う有名な台詞からタイトルを取った『果実の入った水』は、ロンドンに住むカリブ海諸島からの移民の一群に焦点を合わせ、彼らが自分たちの故郷を支配する新植民地主義的な暴君^{ネオコロニアル}に対して革命を企てるさまを描く。ホルツマンの表紙絵がそれまでの漂着物語における身体／本／島の繋がりを描き直しているように、ラミングの小説もプロスペローをプランテーションの所有者、キャリバンを黒人知識人とすることでシェイクスピアの作品を書き換えているのである。

他にも多くのポストコロニアル作家が漂着物語に対して「書き返し」を行ってきた。たとえばデレク・ウォルコットは一九七八年の芝居『パントマイム』で『ロビンソン・クルーソー』を書き換える¹⁾。ウォルコットの劇では白人でイギリス人のホテル所有者であるハリーが『ロビンソン・クルーソー』を舞台用に書き換え、自分がフライデーを、そしてアフリカ系カリブ人の従僕であるジャクソンがクルーソーを演じる。しかしハリーのこの芝居はリハーサル段階を超えることはない。というのも、始めてみるとハリーがこの人種転換に耐えられなくなって芝居を放棄してしまうからだ。彼が恐れているのは、黒人のクルーソーと白人のフライデーのいる『ロビンソン・クルーソー』が「人の心を傷つける…つまりその人々が…あまりの多くのことを考えすぎて、そういうことは私たちの望むことではなく…ただそのちょっとした…娯楽を提供しただけなのだから」(125)ということである。クルーソーを演じる予定だった黒人のジャクソンは怒りと焦燥に駆られ、そうした理由づけが帝国主義における役割変換をめぐるより広い文脈での闘いを象徴するものだと考える——「今ここで俺たちが演じているのはまさに帝国主義の歴史そのものなんだ」(125)と彼は言う。そしてこれこそウォルコットの言いたいことでもあるだろう——『ロビンソン・クルーソー』とその数多の書き換えや翻案は、帝国主義の歴史と反帝国主義の闘争のなかに存在するのだ。そしてこれが本書『帝国の島々』の要点でもある——漂着物語の心理的側面をより詳細に検討することで、私たちはそういった作品が帝国における文化的不安と欲望とをどのように管理す

カニバリズム、野蛮人、海賊

ることに寄与してきたかをより良く理解できるだろうし、これほど多くのポストコロニアル作家たちがそれらに書き返しを迫るほかなかった理由もわかるはずだ。

歴史的視野

ラミングとウォルコットがカリブ海諸島から声を挙げたように、同じ地域出身のエメ・セゼールも『テンペスト』を標的として自らの『もうひとつのテンペスト』（一九六九年）を書いたわけだが、そのような地域性が島を舞台とする書き換えの必然性を物語るとも言えよう。しかし、島嶼国家出身でない他の多くの作家も地球の各所で植民地主義的な島の物語に対して「書き返して」きたこと、実際に他のジャンルや物語よりもずっと頻繁に漂着した島の物語が書き直されてきたという事実をどう受けとめるべきだろうか？²⁾ この問いに応えるために本書ではポストコロニアルな書き換えから時間をさかのぼって、さまざまな植民地時代の漂着物語を帝国主義の神話と心理幻想の文脈で詳細に分析し、植民地主義にそまった作家や読者の無意識にこういった島の物語が何世代も訴えてきた魅力を探りながら、このような島の植民地化を語ることが現実の帝国についての人々の思考や感覚にどう影響してきたかを検証していこうと思う。

文学は歴史的出来事を伝え、また歴史的事象に内容を規定されるものであるから、私としてはできるかぎり、この研究書がカバーする五百年にわたる帝国の歴史的イベントとそれに伴う文学との関係に留意していきたい。植民地主義的な漂着物語のような長い生命を持つ文学のサブジャンルの魅力を検証するためには、それが開始された時点から（そうした時点特定できればだが）多くの作品を扱う必要がある。よって本書では、五百年にわたる文学を「新世界」におけるヨーロッパによる植民地化（伝統的には一五世紀末のコロンブスの航海によって始まったとされている）と、一六一一年のシェイクスピアの『テンペスト』から始めて、十数作の漂着物語を扱っていく。この本で分析されるのは、『ロビンソン・クルーソー』、『スイス・ファミリー・ロビンソン』、『神秘の島』、『珊瑚島』といったよく知られた話から、それほど人口に膾炙していない『ジョン・ダニエルの人生と驚くべき冒険』やパントマイムの『やや移り気な若者ロビンソン・クルーソーと家を綺麗に保つ黒人男フライデー』といった作品、そして最後に『漂着』とかテレビの連続もの『サバイバー』のような二一世紀のポストコロニアルあるいはネオコロニアルな映画や文学の書き換えである。

本書で扱うテキストは、トマス・モアの『ユートピア』やホメロスの『オデッセイ』、^{アイソラリオ}島の文学ジャンル、それにサー・リチャード・バートンによる『千夜一夜物語』のシンドバッド物語などを含む島の物語の長い伝統に従ってはいけるけれども、一五世紀から二〇世紀にかけてのヨーロッパ帝国の拡張に応じて、まさに何百もの異なる島の物語が量産されてきた。本書は帝国に対する態度の変化をたどることで、こうした新自由主義的な漂着物語の歴史的

意義を強調するとともに、個人の漂着から一団の漂着者へと主人公が移ることが帝国主義イデオロギーの変遷を映し出し、個々の企業による経済的計略に基づくものから（キプリングの言い方によれば）「白人男性の重荷」という国家全体のイデオロギーへと変化する過程を考えていく。歴史家たちが指摘してきたように、植民地は単なる経済的利益によって正当化される以上に長く継続してきた。そして島の物語も、帝国の政策と植民地計略とが変わるにつれて変化してきた——ルネサンス期の旅行記のような初期（一五世紀と一六世紀）の幻想に基づいた伝説から、一八世紀のより現実的な島の物語、そして一九世紀の好戦的な島の話まで、それらは形を変えながらも話の語り方が見事に一貫していることは、歴史的な重要性だけでなく心理的社会的な意味を持っていることの証左であろう。

よって本書は歴史に根差しながらも、そうした物語の一貫性をたどり、その心理的社会的な意義を探ることが第一の目的となる。以前の研究によれば、漂着物語はしばしば植民地化を善良なものとして描く傾向があった——一方で漂着者が無人島に流されたのは神の意思であるから不可避なことであり、他方で多くの島の物語において島は無人の場所として、漂着者以前には先住者がいないか、あるいはフライデーとロビンソンの関係のように後から加わった者が先住権を主張しないかのどちらかなので、島の所有が正当なものとするのだ。この本ではこうした議論に加えて、とくに島の物語が作り話にしる、帝国における現実の行いにしろ、それらを身体の心理的経験に結びつけることで植民地化が自然なものとしてきた過程が論じられる。これら多くの島の文学が植民地の風景（この場合は帝国の中心地ではなく植民地）に対する権利の主張を、自分自身の肉体を制御する権利と能力に結びつけていると考えることによって、本書はヨーロッパの帝国主義的文化が幻想を演じ、肉体的幻想と不安を通して帝国の不安に対処するための空間を、島の文学という設定が可能にしているさまを例証していく。

身体としての島

土地と身体との関係を文学作品から分析する研究がまず参照すべきなのは、島や大陸といった風景を身体の隠喩で表す仕方の探求だろう。レオナード・バークマンが次のように言うように、人の身体は人間にとって世界を認識するさいの最も基本的な語りを提供する隠喩となってきたからだ³⁾——「原始時代の人間の生のなかで、自己、すなわち身体は把握可能な唯一の全体性である。人に擬して世界を語ることが他により良いものがないがゆえに、原始的な人間の唯一の世界観となるのである」(8)。人類学者メアリー・ダグラスも『汚穢と禁忌』で、西洋でも非西洋文化でも一般に身体が象徴として機能すると論じ、次のように説明する——「あらゆるものが身体を象徴するのが真実であると同様に（そしてだからこそさらに）、身体が他のすべてのものを象徴するというのも真実である」(122)。「身体とは複

雑な構造であって」とダグラスは述べる、「身体の異なる部位の機能やその関係性が身体以外の複雑な構造をあらわす象徴の源泉となるのである」(115)。本書が主張するのは、島や帝国も明らかにそうした「複雑な構造」であるということだ。

西洋におけるこうした身体の表象概念については多くの理論家たちによる歴史的探求がある。ルネサンス以前の文化においては人間の身体と宇宙とのあいだに統一が目されており、肉体が自然世界のミクロコスモスであるという考え方があったと述べるのはバルカんだ。よってたとえば、クルミの実が人間の脳、その殻が頭蓋に似ているので、それが人間の頭を複製すると考えられた。初期近代の文化はこうした身体と世界との類似をいまだに頭で考えた構築物として捉えていたが、しだいにそれは文字通りの照応関係ではなくなり、科学の領域から芸術や神話の領域へと移動していくようになる。『ボディ・クリテシズム』でバーバラ・スタフォードが言うように、一八世紀になっても肉体は象徴として機能し続け、「人間の身体は究極の目に見える参照項であり、あらゆる方法のなかでもっとも理解しやすい方法、あらゆる構造を組織する構造とされていた。個々の部分は異なっていながらそれらを全体として束ねた目に見える自然の造形として、身体はすべての複雑な統合物を組織する範例にして建築基準であったのだ」(12)。認識体系としての身体はさらに一九世紀、二〇世紀になっても機能し続けていたのである。

こうした身体的アレゴリーの格好の例が初期の植民地文学にある——フィネアス・フレッチャーの一六三三年の詩『紫の島、あるいは人間島』がそれで、生まれつつあった大英帝国全体を象徴する島嶼国家の働きを説明するために身体の隠喩が使われている。この詩の最初の方でフレッチャーは島を地理的に三つの政治的領域に分かたれたものとして描き、それを身体の心臓と頭脳と消化器官になぞらえ、その隠喩を一七一頁に及ぶ詩の残りの部分で延々と説明していく。フレッチャーが使うのは読者におなじみの範疇で、これを読む人は自分の体を通して英国の政治的内実を把握することができる。フレッチャーは人の身体と島嶼国家とを同化することで、読者が容易に消化できる隠喩を提示するとともに、英国の政治体制を創造主の手から直接もたらされた天与の組織体として描き、それゆえ国家には従わなくてはいけないのだという教えを唱道する。土地と君主の身体とを結びつける隠喩の働きは初期近代の文化では珍しいことではないと、エルンスト・カントロヴィッツの『王の二つの身体』は言う。このフレッチャーの詩のように身体を使って複雑な政治体制を説明し従属を奨励する作品と同様に、身体の個人による所有と統制という近代的考え方から生まれてきた島の物語も、帝国の名のもとに土地を領有する政府を読者が受け入れ承認するための心理的メカニズムを提供してきたというのが、ここでの私の議論である。

さらに言うと、これまでさまざまな批評が指摘してきたように、女性の身体と土地との心理的つながりを利用することで、初期の植民地主義文学において白人男性による植民地化が正当化されてきた。そうした議論に私の研究が付け加えるものがあるとすれば、それは文学

および地理の空間としての島を統制すべき空間として使うことが、やや異なった帝国主義的幻想を培っているということだ。つまり、土地の支配を他者である女性の身体への支配ではなく、本人自身の男性的身体への統制として土地を支配する——この区別は重要で、そうして初めて、ある場所を植民地とする欲望がよりよく理解でき、そうした行動を心理的に耐えられるものとするのは何かということがわかるようになるからである。本書『帝国の島々』では島の物語を読み解きながら、そのなかにある文化や書き手の無意識のなかにこうした問題を解く鍵を探し、なぜ読者が特定の物語を好み、また作者がどのように言説を選択していったのかを考えたい。島の物語は多くの帝国主義のテキスト、たとえば小説や日記、書簡、新聞、詩、旅行記、報告、芝居、漫画、映画、絵画そのほかの芸術表現のなかに位置づけられるが、こうしたすべてが言わば隠喩の力によって帝国という暖炉の火を燃やし続けてきた。島の物語もその一部として帝国主義的な振る舞いを正当化しているのだけれども、そこにはテキストの形態は異なってもおそらく同じような心理的メカニズムが作用しているのではないかと。私の望みは、こうした島の物語に注目することで暖炉の周りに集まったそれ以外の顔、つまりその他の芸術ジャンルとの区別を明らかにするとともに、さまざま異なるテキストが帝国主義にまつわる不安や欲望のうごめく心理的空間を作っていく過程を理解するのに役立ってほしいということに他ならない。

なぜ島なのか？

島の物語がどうしてこれほどの力と魅惑を持っているのかという問題を考えるためには、この序章の初めに提起した問い、「なぜ島なのか？」に立ち返る必要がある。ポストコロニアル時代の後継者たちと同様、植民地時代の書き手たちが探究と冒険の物語を作るのにわざわざ島を舞台としてくりかえし選んだのは何故だろう？ 説明の一つとして考えられるのは、こうした作家たちが自分の主人公に孤独による緊張と発明の要請という試練を与えたかったのだということがあるかもしれない。しかし一六世紀から一九世紀にいたるまで大陸のかなりの部分がほとんど探索されていなかったわけであるから、個人の自律や才覚を試すには島以外の場所でもよかったはずだ。また第二におそらく言えることは、自らの島（スコットランドとウェールズを含む）や隣接するアイルランドの支配をめぐる戦いの歴史を経験してきたイギリスの作家たちにとって、島という地理が植民地主義的支配の幻想に無意識に結びつけられていたこともあるだろう⁵⁾。『大英帝国の興隆と崩壊』でローレンス・ジェームズが次のように述べている——「北アメリカにおける最初の植民は、スコットランド長老派の移民によるアイルランドにおける大規模な植民と同時期のことであった。一六二〇年から一六四二年にかけて十二万の植民者たちが、ゲール語を話すアイルランドのカトリック教徒を『文明へと強制』するために到着したのだ、とフランシス・ベーコン卿がいみじくも言った

ように」(14)。第三に島を舞台とすることの人気の理由として、多くの有名な現実の体験に基づく帝国主義的探索の記録(コロンブス、ダンピア、クックなど)が島を関心の中核に置いていたことがある⁶⁾。しかしながら本書では、こうしたさまざまな島の物語の分析に基づきながら、これらの説明では不十分であることを示していくこととなるだろう。島を創作の舞台とすることの魅力は(そしてまたおそらく島が現実の植民地化の舞台とされることの魅力は)より根が深く、広い意味での植民地化が「自然なもの」であり、身体と自然界の有機的システムに起因するという幻想を可能にする能力を島が持っていたことから来るのではないだろうか。

植民地化を自然なものとするこの幻想を説明するために、本書で何度も戻ることになる契機である、植民地主義的な漂着物語においてほぼ普遍的なモーメントの議論から始めるとしよう。メアリー・ルイス・プラットが『帝国のまなざし』のなかで、こうした瞬間を「私が睥睨するすべてのものの君主」と呼んでいる(彼女が扱うのはフィクションでも、島の文学でもない旅行記だが)。旅行記ではしばしば、旅する者をそこに連れてきた現地案内者にはすでに見慣れた景色を、旅行者がその場所を目で観察することで「発見」すると、そのとき彼らは自分たちが代弁する君主の名でその空間の独占所有を宣言する、ということが起きる。プラットの説明によれば、ちょうどマンゴ・パークが「ヴィクトリア滝」という名称をつけたように、しばしば高い位置からなされる観望という単純な行いが、所有している感覚をもたらし、所有権を法的に正当化するのである。

漂着物語というフィクションの世界でも、ほとんどすべての場合に、これと似たような瞬間を見出すことができる。漂着者(ひとりの男、あるいは後になると人びとの小さな集団の場合もある)は最初ひと晩かふた晩、難破に絶望して暗い気持ちでいるか、あるいは日中を難破船から役に立ちそうなものを取ってくることで過ごす。しかし、ある行いが自らの運命を受け入れることになるわけで、つまり漂着者は島に着いてからほどなく、小高い地点に登り、空間全体を見渡すことになる。これが「私が睥睨するすべてのものの君主」の瞬間だ。漂着者の当初の動機は、自分が大陸ではなく島にたどり着いたことを確かめるためかもしれないが、しかしこの睥睨によって、彼は自らの住所を確認し目によって領有することで所有の感覚を獲得する。主人公が島の所有感覚を得るのに、この光景が決定的に重要なのは、この瞬間に彼は「漂着植民者」となるからである。たんに「漂着者」と言わずに、「漂着植民者」という用語を私がしばしば使うのは、こうした物語の底にある帝国主義をあぶりだし、語り意図からすれば、主人公はどこかから切り離されて流れ着いたというよりは、植民の野望をもって連れてこられたと言うべきであって、物語において重要なのは彼が後にしてきた故郷ではなく、彼が到着した島との関係である、ということを強調したいからだ。また私は、漂着者を「植民者」と呼ぶことによって、主人公の運命が自らの行動の結果ではなく、神や自然の導きによるものという、典型的な物語の趣旨を裏切ることも目指したい。なぜなら、

フィクションのなかの漂着者たちの多くは、たしかに嵐にあって島にたどり着いたとはいえ、クルーソーのようにもともと植民者であるか、あるいはヴァイスがロビンソン・ファミリーと適切に名づけたように、植民者になりたかった者たちだからである。この頻繁に繰り返される「私が睥睨するすべてのものの君主」という光景において、山とか丘のような盛りあがった場所に登る以前には、生き残ったサバイバーにすぎなかった主人公が、この瞬間を経ると、島の所有者となるのだ。このようなアイデンティティの劇的変化をもたらす、この瞬間にいったい何が起きているのだろうか？ 説得力のある説明として（さらに島がどうして魅力を持っているかの説明として）、精神分析理論とその身体概念のなかに、その答えがある。

「私という島」(I-Land) と精神分析

人が無意識のレベルで（ほとんどの精神活動がそうであるように）、自らの身体を通して、世界を経験する仕方を考えるには、身体イメージ、まなざし、皮膚と自我といったことに関わる精神分析、とくに体インコーポレーション内化についての精神分析理論が役に立つ。ジグムント・フロイトやメラニー・クラインらの精神分析理論にしたがえば、人が自己と世界との関係を想像するもっとも基本のプロセスはその身体をとおしてであって、私たちはその明らかな例を、自らの口によって世界を体験する幼児に見ることができる。クラインによれば、赤ん坊は吸いこんだり、消費したり、飲み込んだり、吐き出したりといった行いによって、物が口や体をとおして出たり入ったりすることとして世界を理解する。フロイトは、幼児がまわりの環境を口腔によって経験することで子ども時代を過ごしており、欲しい物や理解したい物を口に入れてみるのだ、と言う。デイディエ・アンジューはこの考えを拡張して、赤ん坊が世界とそこでの自分の場所を理解するのは、自らの皮膚を通して、それが大人になって「皮膚的自我」となり、私たちは自分の皮膚との関係において、自らの身体や所有物、他者、そして身近な環境を感知するのだと論じる。我々は大人になっても、自分の身体の内と外にそれぞれ何があるかによって、無意識におのれの宇宙を組み立てるのだ。成長するにしたがって、私たちは文化によって訓練されることで、このような取り込み衝動から直接に表現したり行動したりすることはなくなるけれども、私たちの身体と世界に対する精神的な理解の底には、そのような衝動がつねにあり続ける。西洋資本主義がときに私たちを「食いつくす消費者(consumer)」と呼ぶのは、偶然ではないのである。

身体についてのこうした理解は、島の物語における心理メカニズムの説明として説得力がある。山の頂上で「私が睥睨するすべてのものの君主」として島を展望するときには起きていることの多くが、体内化とまなざしという概念によって説明できるからだ。この情景の最中とその後の漂着者の振る舞いが示唆するのは、彼が自らのまなざしによって島の境界を確か

めているとき、彼は島を象徴的に取り込み始めていることである。第一章で詳しく説明するように、この情景の最中および直後の漂着者の言葉と行動は、その瞬間に彼が島と自分の身体とのあいだに無意識の関係を結び始めていることを示しており、それが物語のなかで発展して、自らの身体を訓練するとともに、彼は自分が「文明化して手なづける」空間にたいする支配を想像することになるのである。

漂着植民者は、島における時間のほとんどを、島をより「文明化された」、自分が故郷に置いてきた西洋的な空間にしようと試みて過ごす。失った故郷に似たものを作るべく、小屋や木の上の家、家畜小屋とか東屋、橋、庭、要塞などを建て、空間を馴染みあるものとするだけでなく、やってくるかもしれない侵入者にたいして自分の領土への権利を主張しておくのだ。ここで重要なのは島という形である。漂着者の身体と同様、島も自然の境界に囲まれている（その全体が山の頂上という視点から展望される）。こうした島の形状が冒険と探索の物語に重要な心理的アピールを提供するのだ。島は確固たる周囲と自然の境界に囲まれているという性質ゆえに、皮膚に閉じこめられた体という認識を反映することができ、それゆえ作者も読者も自らの身体を所有するように、島を支配し所有する幻想を自然に抱くことが可能となるのである。

ここで、人の身体が「自然の境界によって囲まれ」、個人として所有されコントロールされているという考え方にもう少しこだわってみよう。この発想はノルベルト・エリアスのような文化史家によれば、中世や前近代にはなく、近代になって生まれてきたものだという。この概念が二〇世紀終わりから二一世紀初頭には、一種の文化強迫のようなものとなって、ダイエットや健康法、ボディビル、化粧品から整形手術まで大金がつきこまれ、さらにはローウェードの裁判（アメリカ合州国の最高裁が、私たちの体は私有物でそれをコントロールする権利があるという主張のもとに妊娠中絶を法的に認めた判決）に具体的な例を見るまでになった。エリアスは『文明化の過程』のなかで、ヨーロッパが封建時代から近代へと移り変わるにつれて、身体を封建体制のなかで神や王に所有されるものとする以前の考え方が、自立した個として想像することに置き換えられていったと論じる。エリアスによれば、エラスムスが一五三〇年に書いた『子どものしつけについて』という身体機能の適切な扱い方をまとめた本のなかに、身体の文化的把握が中世から初期近代へと移り変わる徴を見ることができると論じる。エリアスは言う、中世の人たちは「中世の習慣として一緒に食事をし、同じ皿から指を使って肉を取り、同じ杯からワインを飲み、同じ鍋や皿からスープを飲んでいた」わけで、「私たち近代人とはお互い同士が異なる関係にあった」（p.69）。同様に、ゲイル・カーン・パスターも、ルネサンス時代における私有観念の発達とともに「恥の境界」が生まれたと論じる。すなわち、人びとが身体機能から心理的にも言語のうえでも距離を置くようになると、もろもろの身体機能を恥と見なすことが増してくる。このように正しい身体的振る舞いについて新しい規則ができて、身体と食べ物や他の身体とのあいだに距離ができるように

なると、封建的な集团的アイデンティティから、経済的個人主義にもとづいたそれぞれのアイデンティティへの移行が起り、それは地理的にも時間的にも商業や国際貿易の増加と一致しており、近代資本主義に内在する消費概念の形成とも軌を一にした動きだったのである⁷⁾。アンソニー・シンノットが『社会的身体』のなかで、次のように同様の観察をしている——「エラスムスの本からたった百年で、個人が孤独で（他者から切り離され）、世俗で（神から切り離され）、二重である（内的に分割されて）という新しい現実がデカルトの「私は考える、ゆえに私は存在する」という言い方で簡潔に表明されたのだ」（p.19）。

身体把握とアイデンティティのありようがこのように変化すると、漂着物語の生産も増加していくことはけっして偶然ではないだろう。シンノットの言葉をふたたび借りれば、「ルネサンス以降、誰もが島になっていく——それをデカルトが示唆し、ダンは異議を唱えたのだが」（p.19）。このように身体が新たに他と区別され境界に囲まれた空間として想像されるようになると、自然な境界によって仕切られた島が、個人によって住まれ、単独で支配する、つまり一言で言えば植民化する空間として完璧であるという想定が生まれてくる。肉体も島も目に見える確固とした境界をもった独自の存在として理解されたので、ちょうど人が自らの皮膚という境界のなかにある中身をコントロールするように、そのような境界に囲まれた空間すべてを一人の人間が支配できるという幻想を、島の形状が支えるようになるのである。島と人の身体とのあいだのこの想像された関係をさらに詳しく検討することで、この本で扱われるテキストが所有の物語としていかに機能しているか、そして漂着者（と読者大衆）がいかに植民を正しいものとして想像するようになるのかの理解を深めることが、ここでの目的となる。

島の物語が示唆しているのは、それを読む読者の帝国主義的な欲望をそうした物語がくりかえし描きながらも、同時に、植民化に内在する不安をも表しているということであって、これらの物語は漂着者の肉体について語ることによって、そうした不安を描写してしまうのだ。征服後、帝国主義の組織はそのエネルギーの大半を、植民地における秩序の維持に振り向ける——官僚機構の整備、道路や社会的設備の建設、先住民間の紛争の仲介、反抗の芽を摘むこと等々。植民者の文化には、反乱への恐れと、帝国主義的征服の道徳性に対する疑問がつねに不安としてつきまとっており、島の物語はそのような不安を表明しているのである。島の植民者の肉体そのものにおいて、帝国の欲望が演じられていたとすれば、不安も同様であって、それはメアリー・ダグラスが『汚穢と禁忌』で言うように、「脅かされたり不安定となった境界こそ、境界によって表象される」からだ（p.115）。島の物語が象徴するのはまさにそのような不安であって、そこではフィクションのなかの植民者が、自らの肉体の境を強化し男性的なものとすることによって、自分の皮膚という境を出入りするものに対する支配力を行使するという幻想を生きている（この点については、第二章で詳しく論じる）。こうした自己防衛イデオロギーはあきらかに男性的なものであって、それはジェンダー、つ

まり実際には男性性こそが島の物語では重要だからである。このイデオロギーによって、力を持った者と無力な者、統御されたものと制御の利かないもの、人間と動物、そして白人と非白人とが区別されていく。第三章で検討するように、海賊につかまったり、食人種に食われてしまったり、先住民と同化してしまったり、刺青を入れられてしまったりといったことが、身体のコントロールを失うことに対する不安の証になっており、それらが植民地主義的秩序の喪失を象徴する一方で、男らしい自己抑制された物語の筋が堅持されることによって、宗主国の読者にとってそうした不安が和らげられたのである。

読者と再コード化

島の物語を読むことが、読者の植民地化に対する反応にどう影響するのか——この問いに答えるために、本書は文学作品における植民化の心理を、植民の歴史的事実のなかに位置づけて探究する（ここで言う植民の歴史的事実とは、実際の植民という出来事とその発展だけでなく、島の物語が書かれた現実の背景、それにこうした幻想が頻繁に繰り返される必要性といったことを含む）。『帝国の島々』の主張は、「普通の」市民が自分たちの帝国について感じていた不安や欲望を手なづける、つまり自分たちの幻想を肯定する手段を、これら島の物語が提供していたのではないかとということにある。精神分析医が患者の幻想を分析するときには、繰り返される行動の原因を探るのが常道だ。それに似ているが、反対に、本書の分析は、（漂着者物語の生産と消費という）反復行為を、「患者」（文化）の幻想を探る手がかりとする。ジャクリーヌ・ローズは『幻想の状態』（一九九六年）で、幻想を「防衛のための創作」とするフロイトの理論を引き、さらにそれを「心のなかで耳を傾けてほしいとあがいている記憶を純化し、そうすることで何らかの形で記憶を認知しようとする方法」であると説明している（p.5）。この本を通して私は、島の物語が文化幻想として機能してきた仕方を検討する際に、幻想を欲望の表明、恐れに対する防衛し、そして抑圧された現実の証拠として考える、以上のような捉え方を指針としていきたい。

不安や欲望を文化が管理するうえで、どう島の物語が機能してきたのか、またなぜそのような機能を文学が果たしてきたのかを理解するには、ジレ・ドゥルーズとフェリックス・ガタリが『アンチ・オイディプス——資本主義と分裂病』のなかで説明する心理的再コード化の理論が役にたつ。彼らの議論によれば、「エディプス・コンプレックス」とフロイトが名づけた自然な心理状態を記述するときに、フロイトが認識していた欲望と抑制のパターンは、人間の心理にだけでなく、西洋資本主義にも内在するものだという⁸⁾。すなわち、フロイトは文化と経済のシステムを男性の自然な心理的発展の観点から論じることもできたのに、彼は意図せずに社会的文化的なパターンを個人の心理に、つまり通過儀礼の物語として投影してしまったのだ。フロイトは、ヨーロッパ資本主義の社会システムとその社会的軋轢を個人

の心理というモデルに転移（ドゥルーズとガタリの言葉では「心理的再コード化」）してしまい、現実世界の不安や欲望という大きな世界を、「正常な」心と体という微小な世界のモデルに置きかえた。もちろん、フロイトが個人の心理として描いたヨーロッパの資本主義は植民地化のシステムに基づいていたことを、私たちは知っている⁹⁾。よって、ドゥルーズとガタリの定義によれば、フロイトによるエディプス・コンプレックスの理論は、植民地闘争という経済的・政治的・社会的システムをも説明するのだ。近代世界の経済、政治、社会は帝国の遺産によってもたらされたわけだから、人がいかにアイデンティティに直面するかに関するフロイトの理論がまさに帝国の不安と欲望から発していることは、納得のいく話だろう。

私がドゥルーズとガタリの理論を使うのは、漂着者物語がどうして帝国の欲望と不安という大きな図式の縮小版の役割を果たすのかをそれが説明してくれるからだ。つまり、こうした島の物語の多くは、（植民地化という）社会文化現象にともなう欲望や不安を、（小説の物理的・時間的・空間という）特定の空間に囲われた代表的な物語に映しだし、その主人公である一人の男性の個別な心と体のうえに描写する。かくして、複雑で両義的な社会システムが、本の頁のなかの小説というジャンルに描かれた一人の男の頭のなかに表象されるのだ。ちょうどフロイトがエディプス・モデルを自然なものとして内面化し、それが「通常の」心の発達過程の一部であると考えたように、島の物語の著者たちも帝国主義のイデオロギーを内面化して、ひとりの漂着植民者が生き残って自らの身体を「自然に」管理するという、自然で論理的な行動の一環として描く。こうして島の物語の生産は（著者も、またそのような物語を要求し、それを受け入れた出版人も）帝国が抱える問題や理念を無意識に、孤独な男性植民者の身体に内在化するのだが、それは住民のいない境界に囲まれた一つの島という空間を取り込み支配することによって可能となるのだ。そして、植民宗主国の読者はたとえば、このような島の物語を消費することで、現実世界における欲望を再コード化し、そこに含まれた心理社会的な問題を認知し管理することができるようになったのである。

『帝国の島々』では「心理社会的」という用語をずっと使うが、それはこの本の対象が島の物語における心理学と社会学との複雑な絡み合いにあるからだ。すなわち、ここで私が検討するのは、こうした物語が植民地化の不安を管理するために個人の心を援助することで、心理的な過程に参加する様子である。同ときに本書は、植民地主義の文化システムが島に漂着した話のなかで再コード化される過程を分析することによって、社会的な説明をもめざす。『帝国の島々』は多くの点で、ケリー・オリバーが『心理空間の植民地化』で提唱する理論を実証するものだ。すなわちオリバーによれば、「この理論は心理と社会とのあいだで機能し、それによって精神分析の用語そのものが社会的概念に転化するのである」(p. xiv)。オリバー同様、私も帝国という問題においては、心理と社会という二つの領域が絡み合って互いに依存関係にあることをここで示していきたい。

方法論

ここで少しだけ、私の研究者としての方法論について述べておきたい。『帝国の島々』では一貫して精神分析の議論を採用するが、私が使いたいのは「状況に即した精神分析」、つまりアン・マクリントックが「文化状況に沿った精神分析であって、それは同時に精神分析によって裏付けられた歴史でもある」という意味でのそれだ（『帝国の革ひも』 p.72）。一言で言えば、ランジャナ・カーナの『暗黒大陸』と同様、ここでも植民地主義の衝動を理解するために文学に焦点を絞るとはいえ、そのとき忘れてはならないのは、精神分析理論が同じ植民地主義の衝動と同時期に作られ、そのような衝動への反応であり、またそれと共犯してもいた、ということである。精神分析において明らかにされる境界に囲われた自己という概念は、自分と対照される他者を必要とするが、そのような他者として、植民地化のプロセスを通して発見される他者以上にふさわしいものがあるだろうか？ 精神分析を植民者の心への窓として使おうとする本書のような研究では、用語や理論を慎重に文脈づけて使うことがきわめて重要だ。なぜなら、カーナも述べているように、精神分析、それに心理学や精神医学も「ヨーロッパの植民者によって…被植民者を分析し、診断し、抑圧するために用いられ、ときにこうした目的のために学問分野の基本的想定が変えられもした」のである（p.26）。ルービン・ファインのような精神分析の歴史研究者が明らかにしてきたように、この学問は初期の植民地主義に根差した歴史状況のなかから生まれてきたのであって、一七世紀と一八世紀の科学者たちは、心の病を気質の不均衡や悪魔に憑かれた結果と考える代わりに、社会的文化的な原因によって生み出された心理的病気であると見なしはじめていた。フロイトによる無意識の発見と、防衛機制として神経症が認知されることによって、家族とヨーロッパのブルジョワ社会（それはエドワード・サイードによれば、植民地主義の足場の上に築かれていた）とが、そうした病気の温床として精査されることにもなった。精神分析が規定した自己は、たとえ階級、ジェンダー、人種、宗教によって帝国の戦利品からまったく除外されていたとしても、本質的に近代の、すなわちヨーロッパ帝国主義の自己である。（たとえばフロイト自身、自らのユダヤ出自が出世の妨げになると考えていた。）フロイトは精神分析と帝国との関係についてはっきりとした言葉を残していないが、歴史とイデオロギーのつながりについて示唆的なのが『トーテムとタブー』の副題「野蛮人の精神生活と神経症とのあいだの類似関係」であって、そこでは神経症が近代の状況であることが述べられている。フロイトの説明によれば、被植民者、すなわち「野蛮あるいは半野蛮な人種」の精神生活が「我々の興味をとくに魅くのは、そうした人びとの精神生活のなかに我々自身の発達の初期段階が見事に保存されていることがわかるからである」（p.3）。フロイトが活動していた時代は、反復発生理論（類の発達が個の発達の反映であるという考え方）が王座にあっ

た時代であることを思えば、ここで言われている「我々」が植民体制のいわゆる中核に住んでいる近代人であって、その対照とされているのが被植民者であることは疑いの余地がない。

さらに方法論に関することだが、『帝国の島々』は、何世代にもわたる多くの作家たち（その作品から推察しうる限り）と読者たち（彼ら彼女らが選択した読み物から推察しうる限り）の無意識の思考や欲動に探りを入れるのだが、そのさい、無意識への手掛かりをつかむのに、心理学者や精神分析医ならば自由連想や催眠、夢といった者のなかの語りや言語を読解しようとするところを、私は文学テキストを使う。心理学者や精神分析医同様、私もテキストの語りや言語を読み解くが、同時にまた、テキストにつけられた挿絵や販売実績、それがどう使われたかに関する情報まで、すべてが個人と社会の無意識に対する省察となり、文学の社会心理学的影響をさぐるのに役立つ。私たちは自らの読者や教員としての経験から、物語が思考に影響することを知ってはいるけれども、一冊の本を読むことで誰かの意見が変わるとか不安が鎮まるとかいった、明らかな結果をもたらすようなことはあまりなく、幻想にすぎないことが多い。本書のような研究では、そうした証拠はとくに捉え難いことが多い。というのも、作品もそこに出てくる人びとも歴史的に隔たりがあり、読者はといえば、必ずしも作品に対する反応を意識しておらず（しばしば無意識のものであるから）、それを記録できるわけではないからだ。もちろん、あらゆる読者が同じ話に同じ反応をするわけではないのは当然だが、出版するほうでは読者から似たような反応を期待していたはずだ、でなければ形を変えて同じような話を何度も出版することはなかっただろう。このような一般化の危険はたしかにあるが、世代を超えた読者が島の文学を消費し続けたことの心理的社会的な意味を、『帝国の島々』は探究するのである。

本書の性格からしてもうひとつ求められることは、テキストがふくむ物語を読解するとともに、そのテキストがどのように使用され意図され受容されたかの証拠を本のなかにある具体的なかたちとして分析することだ。そのために、本書では随所で出版された本の挿絵を参照して、それが読者に対するテキストのメッセージとしてどのような影響を与えたのか、また挿絵作者がどのように物語を受け取ったかの証拠としても考えてみたい¹⁰⁾。これらの本を何冊も眺めてみてわかったことは、本の装丁によって私自身のテキストに対する態度が影響されており、印象的な挿絵によって特定の場面や人物への自らの反応が形作られるということである。過去の読者たちも同様に、島の物語がどのような形で提供されてきたかに影響を受けてきただろうし、それが挿絵や他の物理的要素を適宜考慮に入れて、（少なくとも出版者が考えていた）読者や文化の隠された心理を探る手がかりとすることに根拠を与えることになる。同様に、こういったテキストが生産されてきた歴史をたどることも、イデオロギーが集団的に作られてきた現実を省察する便^{よすが}となろう。私の分析によれば、テキストはさまざまな人びと（著者、編集者、挿絵画家、出版者、翻訳者）が協力して作り上げたものであって、そのような協働体制が植民地主義のイデオロギーを生産したのだ。さらにこうした出

版に関わる約束事は、しばしばそれ自体が批評的営みでもあった。たとえば、『ロビンソン・クルーソー』の挿絵が以前の挿絵に基づきながらそれらをどのように改変していったかを見ることで、テキスト間の興味深い力関係を観察することができるし、あるいはまた、一九世紀に新しく出版された『ロビンソン・クルーソー』の版にデフォーを英雄化する伝記が序としてつくといった伝統の新たな展開もある。こうしたことがテキストの異なる版のあいだや、長年にわたってさまざまな版を生産してきた多くの人びとのあいだにある隠された関係をはぐくみ、著者と読者との関係と同じくらい強力な伝統を形作ってきたのである。

読者の心理という捉えどころのないものを理解するために、私はさまざまに異なる学問分野や理論の助けを借りてくる必要があった。寓話にある四人の盲人のそれぞれが象の異なる部位を感じて描写しようとするように（ひとり鼻、ひとり脇、ひとり足、ひとり尾）、文化現象の分析には異なるアプローチ（文学研究、ポストコロニアル研究、人類学、地理学、精神分析理論など）が違う言語や約束にしたがって同じ動物（この場合は近代の帝国主義文化の心理）を描写しようと試みるのだ。それらの語りを一緒に束ねることでやっと、帝国と呼ばれる獣を三次元で描写することが可能になるのである。

島の概観

『帝国の島々』全体で、以上述べたようなアイデアがどのように発展するのかを予告しておいても無駄ではないだろう。第一章では、これまで概括してきたこと、島の物語がいかにして欲望を正当化して植民地における権威を確保してきたかが、肉付けされていくことになる。身体と空間の把握に関する精神分析理論を参照しながら、この章では漂着した植民者が自らの空間にたいする支配を想像させるのに役立ついくつかの植民地主義的な行いを分析する。パトリア・シードが「所有の儀式」と呼ぶこれらの植民地主義的行為には、地図作成、建造物の構築、動植物の飼育、さらには漂着者の必要にしたがった地形の変更までが含まれる。これらすべてが、漂着者の変化する身体を島の空間の変化と心理的に結びつける過程であって、それによって漂着者は島への統率力を自然なものとして獲得していくと同時に、自らの身体への統率力（自分のからだに対する「規律」）をも増していくのである。

第二章では、規律と欲望に関するそれまでの議論に基づき、物語が島のファンタジーを作り上げていく際に、いかにして「自然」や「性質」に対する統制が白人の帝国主義的男性性や、男らしい力強さ、自然の法などといったものと同一視されていくかに焦点を合わせる。島の物語にはときに複数の男性主人公が登場するが（ときに女性主人公も）、物語は一貫してもっとも男らしい白人男性が（「男らしさ」の定義は時代によって変化するとは言え）自らの規律と力量によって島の所有権を獲得する過程を描く。この規律をもった男によって、女性や他の漂着者は庇護され統率される必要がある。というのも、彼女たちは白人男性主人

公のような完璧な自己抑制を欠いているので、計画を立てたり熟慮することも肉体的な欲求を抑えることも、明るく振る舞ったり集中心を保つこともできないからだ。『スイス・ファミリー・ロビンソン』が一例だが、漂着者である父親が妻を支配し、四人の息子たちを良き植民者へと育てあげて、自らの肉体にたいする父親らしく男らしい統制を島の法として内面化していく過程が描かれていくのである。

第三章と四章では、島の物語によってトラウマ、とくに想像された自然の帝国主義的なコントロールが崩壊することにたいする植民者の恐怖を管理するプロセスが分析される。帝国主義の欲望を正当化しながら安心を確保するために、こうした物語は島と帝国にたいする脅威を象徴する身体的脅威に打ち勝って排除するドラマを演じるのだ。第三章は食人種と海賊によって漂着植民者が脅かされるという「反体内化」の不安に焦点を合わせ、島と身体とをともに奪われることによって植民者に権威を付与した体内化の行いが反転する語りに注目する。たとえば、島の物語はしばしば食人種と海賊による侵略とを一緒に描き、(『ロビンソン・クルーソー』や『マスターマン・レディ』におけるように) 食人種が植民者の島と身体にたいする先住勢力からの脅威とすれば、海賊は漂着植民者と競い合う「悪い」植民者からの身体と島への脅威を表わすものとされる。第三章ではまた、食人種と海賊の魅惑にも注目し、漂着者がカニバルとなったり(ポーの『アーサー・ゴードン・ピムの物語』のように)、海賊になったり(バランタインの『珊瑚島』のように)することで、登場人物が道徳的な責任から免れ、読者が安全にこうした危険な幻想におぼれることを可能にしたことが検証される。

第四章はコントロールの喪失という議論を拡大して、三章における反体内化の分析から「反転移」の考察へと向かう。第一章で祖述した馴化の物語とは反対に、植民者たちは島によって変移させられることを恐れ、(『ドクター・モローの島』のプレディックが恐れるように)「野蛮な汚点」に侵されて「退廃」し「先住民化」してしまう恐怖を抱えている。ジュール・ヴェルヌの『神秘の島』もそうだが、多くのテキストには規律正しい漂着者とは正反対の野性的な人物が登場したり、島の野蛮さに侵された先住者(人や動物や怪物)が出てきて、それらの人物をテキストは刺青や黒い肌、動物や怪物のような性格で示す。この章では、植民者と島の動物たちの関係を調べることで、いかに漂着者が科学や法の力を借りて島の野蛮さに対抗し、自らの身体の境界を閉じ「汚染」から守ろうとしたかを検証していく。

本書の第五章が検討するのは、自己を正当化する心理がドラマとしてくりかえし展開されることに抗うようないくつかのテキストである。ここで扱われる一八世紀と一九世紀のバレスク上演やパントマイムは、帝国主義のイデオロギーと複雑な仕方で交渉を行っており、人びとが帝国にたいして抱いていた両義的な感情を場所や観客の違いを考慮しながらさまざまに解きほぐしたり具現したりしていた。ギルバートとサリバンの『ユートピア有限会社』とか、トマスダフェットの『にせテンペスト』、ジェフリー・ソーンの『ロビンソン・クル

ーソーと家掃除のハーレクイン・フライデー、およびリバプール町のポリーという名のクリスマス豪華パントマイム』(一八九五年)といった大衆演劇は、いずれも観客の笑いを誘うことで、人びとが帝国の暴力や自己破壊の行動に対して潜在的に抱いていた不満を認知させ促すのだ。ミヒャエル・バフチンが『フランソワ・ラブレーの作品と中世・ルネッサンスの民衆文化』でカーニバルについて論じているように、こうした演劇も抵抗のエネルギーを分散させる制限された空間を提供することによって、民衆の不満を動員すると同時に抑え、最終的には帝国に抵抗するのではなく、その道具として機能してきたと言えるのではないだろうか。

本の最終章は、なぜ現代のポストコロニアルな観衆が島の物語という幻想に魅かれ続けているのかを、アメリカ合州国のテレビ番組(『サバイバー』とか『誘惑の島』など)や映画(『漂着者』や『ビーチ』など)から探ろうとする。こうした二〇世紀終わりや二一世紀初頭の漂着物語の映画版には、アメリカ合州国を中心とする新帝国主義的なファンタジーが機能しているのではないかというのが、この章での議論だ。ここでの主要な関心は、いまや新帝国主義権力の要と考えられているアメリカ合州国が、伝統的な植民地主義言説にまだに頼っていることにある。アメリカ合州国の歴史を考えると、世界の島々が欲望と不安とをともに喚起する場所であることが見てとれる。島ではない国家である(とはいうものの、自らを政治的には島として考える傾向のある)アメリカ合州国は、歴史上、色々な島を州として(ハワイ)あるいは保護領として(プエルトリコやフィリピン)併合する欲望を抱いてきた。しかし同時に、島はアメリカ合州国における不安の場をも形成しており、そのことは南北戦争以来、アメリカ合州国本土への襲撃は、一九四一年一二月七日のハワイと、最近では二〇〇一年九月一日のマンハッタンへの攻撃以外にないことから見てとれよう。島と男性的身体と国家の想像力とのあいだに無意識の絆を見出そうとする本書の主張は、真珠湾やマンハッタンへの攻撃がアメリカ合州国の国家的男性性への挑戦であるという考え方を解きほぐす手がかりともなるだろう。ことにそれは、ニューヨークの二つの貿易センタービルを国家的フォラスと見なすことでより明白になるかもしれない¹¹⁾。新帝国主義的な現代においては、企業活動がグローバルに拡大し、テロリズムに対するパニックが国境を越え、第三世界の医療や技術が西洋によって搾取され、情報の専制とも言うべき事態が(医療記録から衛星写真にいたるすべてにおいて)蔓延している。そのような状況では、帝国主義の内的論理をきめ細かく理解することがこれまで以上に必要であり、それには帝国の心理学を探究し続けることが求められよう。『帝国の島々』がめざすのは、植民者が自らの暴力を正当化し、作家たちがくりかえし同じような島のファンタジーを作り続け、読者がそのような物語を喜んで受容し続けることを可能にした、植民地主義の背後にある複雑な心理的プロセスを十全に理解することなのである。

注

- 1) ポストコロニアルな対抗言説による「書き返し」のさらなる分析については、アッシュクロフト、グリフィスズ、ティフィンの『帝国への書き返し』と、ジュディー・ニューマンの『弾丸と文学——ポストコロニアル小説』を見よ。
- 2) すべての書きかえ作品を網羅できるわけではないが、『ロビンソン・クルーソー』から範を得た詩作品のリストには、以下のようなものが含まれる。エリザベス・ビショップの「イギリスのクルーソー」、セント・ジョン・パースの「クルーソーのイメージ」、イアン・クリチトン・スミスの「ロビンソン・クルーソーの手帳」(一九七五年)。小説作品としては、ミシェル・トゥルニエの『金曜日』、ミュリエル・スパークの『ロビンソン』、ジャン・ジロドーの『スザンヌと太平洋』、J.M.クツェウの『敵あるいはフォー』がある。『テンペスト』の書きかえには、ラミングの『木の実の入った水』とセゼールの『あるテンペスト』以外にも、の他に、マリナ・ウォーナーの『インディゴ、あるいは水の海図』、ロバートソン・デイヴィスの『捨てられたテンペスト』がある。

他の島の物語(それ自身が『ロビンソン・クルーソー』の書きかえであることもあるが)の書きかえとしては、ウィリアム・ゴールディングの『蠅の王』(一九五四年)と『ピンチャー・マーティン』、マリアヌス・ウィギンズの『ジョン・ダラー』、J.G.バラードの『コンクリートの島』、そして最近ではヤン・マーテルのブッカー賞受賞作『パイの人生』がある。もちろん他の植民地主義テキストの書きかえでよく知られたもの、たとえばシャーロット・ブロンテの『ジェーン・エア』を書きかえたジーン・リースの『広き藻の海』や、エミリー・ブロンテの『嵐が丘』の書きかえであるマリーズ・コンデの『風の吹く丘』のような作品もある。(興味深いことに、原作とはちがって書きかえ作品はしばしば島を舞台としている。)しかし数の上では、書きかえる熱意を促してきた植民地主義的なテキストとして『ロビンソン・クルーソー』と『テンペスト』の二作に勝るものはない。

- 3) 人間の身体が文化的構築物かつ表象システムであることの分析については、メアリー・ダグラスの『自然な象徴』、アンドルー・ブレイキーの『身体——社会学における決定的概念』、クリス・シリングの『身体と社会理論』、アレクサンドラ・ホソンの『社会における身体——入門』、アンソニー・シンノットの『社会的身体』、エリザベス・グロスツの『不安定な身体』、ピーター・ブルックスの『身体活動——近代言説における欲望の対象』、デヴィッド・ヒルマンとカルラ・マツイオの『部分に分かれた身体——初期近代ヨーロッパにおける身体性の幻想』といった著作も見よ。
- 4) ダイアナ・ロクスリーが『悩ましき岸辺——島の文学』で、またドロシー・レーンが『抵抗の場としての島』で、島を植民化とポスト植民化の物語に特異な舞台として検証しており、本研究の確固たる基盤となっている。この二つの先行研究のどちらも島を舞台とした文学の分析に焦点を置いているが、植民地の物語の場所として島という形式が使われ人気を得てきた心理的な理由を探究しておらず、それが本書と異なる点である。ポストコロニアル文学における島の分析については、クリス・ボンギーの『島と亡命』も見よ。エリザベス・デローリーによる「島の祈り、列島のロザリオ——カリブ海と太平洋の列島文学」も、孤島ではなく列島の一部としてではあるが、島という形式を検討している。風景を批判的に分析したいいくつかの研究が、文学に描かれた風景を隠喩として読み解く私の分析を助けてくれた——W.J.T.ミッチェルの『風景と権力』、デニス・コスグローブとステイヴン・ダニエルズの『風景の図像学——シ

ンボルによる表象、デザイン、過去の環境の使用に関する研究』、スティーヴン・ダニエルズの『視覚の場所——英国とアメリカ合州国における風景イメージと国民のアイデンティティ』、およびイーフ・トゥアンの『トポフィリア——環境把握、態度、価値の研究』など。

- 5) 本書ではアイルランドのテキストが研究されていない（アイルランドの人間が書いた『ガリヴァー旅行記』が含まれてはいるが、アイルランド島そのものを舞台としたものは探究対象となっていない）けれども、アイルランドは英国の植民地化の試験場だったのだから、ある意味ではここで扱われている作家によって想像されたあらゆる島々がアイルランドであるということもできる。そのことは、カリブ海諸島、ニュージーランド、オーストラリアほかの島植民地、そしてインド、カナダ、アフリカといった島でない植民地についても事情は同じだ。
- 6) 多くの批評家たちが論じてきたように、こうした最初期の島の物語のなかには現実に起きた出来事を基にしたものがある。『テンペスト』はルネサンス期の有名なシー・ヴェンチャー号の難破を基にした部分があると言われているし、『ロビンソン・クルーソー』も、自分が乗船していた船の船長との口論が原因である島に四年間流されていたアレクサンダー・セルクレイグ（彼の話をもとにしたものでは「アレクサンダー・セルカーク」と呼ばれている）の難破話に基づいている。もうひとつ当時有名だった漂着者には「モスキート・インディアン」として知られていた男がおり、ウィリアム・ダンピア船長によって誤って島に置き去りにされて四年間そこで過ごした。こうした現実の話が植民地的な文学想像力を刺激して、著者も読者も自らの島植民地を創作する幻想にふけたのだ。いったんこうした難破した植民者の物語がヨーロッパ人の想像力に入りこむと、それは定着して帝国主義のトポスとなったのだが、大概の場合こうした漂着者の神話は元々の筋書きの一部しかなく、植民が成功することになる部分だけを採用したと言えよう。
- 7) 経済的個人主義については、イアン・ワットによる議論『小説の勃興——デフォー・リチャードソン、フィールディング』と、C.B.マクファーソンの『所有個人主義の政治理論』を見よ。
- 8) フロイトの理論が西洋資本主義を焼き直したものだという考え方は、精神分析が被植民地で採用されてきた状況を検討すると明らかになる。クリスチアーン・ハルトナック（「フロイトの机上のヴィシュヌ神」とアシス・ナンディ（「野蛮なフロイト」）で論じているように、インド精神分析協会を一九二二年に設立してインドにおける精神分析医のパイオニアと見なされたギリンドラセカール・ボースは、インドの心理学を論じたなかで、フロイトのオイディプス理論を手直ししてインドでは適用せざるをえず、英国の帝国主義的な父権主義に抵抗するインドの現実の必要から、息子が父親に屈する代わりに彼を去勢すると変更したという。
- 9) ヨーロッパの植民地主義との関係における『アンチ・オイディプス』の議論については、ロバート・ヤングの『植民的欲望』が参考になる。ヤングによれば、土地が植民地化されると、アメリカ合州国やヨーロッパの植民者たちはそこに現存していた先住民の言語や教育、経済のシステムを脱領域化したうえで、それらを再領域化する（そうしたシステムをアメリカ合州国／ヨーロッパ／帝国／資本主義のイメージにしたがって再構築する）。フロイトによる転移の議論に懐疑的な論としては、ジョン・ブレンクマンの『異性愛者、男性、近代』も参照のこと。
- 10) 書物の挿画の議論に関しては、エルヴィン・ゴフマンの『ジェンダーの広告』というその後の議論に影響を与えた本、およびグンター・クレスとテオ・ヴァン・リーヴェンによる『イメージを読む——ヴィジュアル・デザインの文法』で創始されたテクニクに従っている。

- 11) 男らしさと9・11とのつながりについては、マーカス・ウィーバー＝ハイタワーの『テロリズムのジェンダーと英雄たち?—2001年9月11日以降、男性と男らしさについて教えるべきこと』、それにアン・マクリントックの「男らしさと他者の戦闘区域」を見よ。

追記 本稿は、2016年度の東京経済大学個人研究助成費（受給番号16-25）を受けた研究成果である。